
S F 奇兵隊 伝法斑の狗

永良隆樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SF奇兵隊 伝法斑の狗

【Nコード】

N1516A

【作者名】

永良隆樹

【あらすじ】

米大統領選挙でリンカーン落選。この一事が遠い小国の命運を左右する。小国の名は長州。四力国会談において、米彦島占拠。四境戦争の敗北により萩陥落。長州は内戦国となる。略奪、奇兵狩りと称した虐殺。横行する民衆への暴力。蒼氓枯らしてなるものかと、剣を取る男ふたり。人称して、「斑の狗」。

プロローグ

序章

1・プロローグ

西暦1860年米大統領選挙にて、奴隷制廃止を訴えるエイブラハムリンカーン落選。これで2度目の落選となる。落胆する周囲の人々に「また、4年後だ」不屈の人はつぶやく。だが、年齢的にも党の方針としても（2度落選した者を再度御輿に担ぐか）、望みは薄い。

代わって当選したのはダニエルリルチ。南部出身のタ力派の政治家だ。強いアメリカを公言してはばからない。野心家だ。

ところで物語の舞台はアメリカではない。そこから大洋を臨み遠く離れた小さな国。その中のまたひとつの小国が舞台だ。小国の名を長州という。

歴史の齒車

2・歴史の齒車

- ・攘夷決行督促の勅旨、朝廷より下る。
- ・長州藩、関門海峡を通過する外国商船を砲撃。
- ・報復として、二隻の外国軍艦が下関を襲撃。前田砲台、壇ノ浦砲台は壊滅。米兵は一時、下関に上陸。
- ・高杉晋作、奇兵隊を創設。
- ・『八・一八の政変』、『蛤御門の変』起こる。長州は朝敵の烙印を押され藩士は京都を追われる。
- ・幕府は長州征討軍を編成、長州征伐に乗り出す。
- ・四ヶ国連合艦隊、関門に至る。諸外国との和平会談持たれる。会談において、米国は下関西端にある彦島の貸借を希望。長州側は言語道断として譲らず、ならば海峡を行く船舶の安全を護る為強硬な手段に訴えるしかない。米国は主張。
- ・米国、彦島占拠。下関をその勢力下に治める。彦島要塞と化す。
- ・奇兵隊、ゲリラ戦にて徹底抗戦。
- ・幕府の征長遠征軍、長州藩四境を包囲する。
- ・・・・そして。

3・来し方

「あわわわわ」と言ったかもしれない。「どひよひよひよ」かもしれない。奇声を発しながら、小一郎は山中を逃げていた。今何処にいるのかも、どちらに向かっているのかも定かではない。必死で、這うようにして道なき木立の中を、笹藪の中を逃げていた。ひどい負け戦だった。幕軍の腰抜けどもにいいようにやられてしまった。米国製の大型の大砲のせいだ。敵は倍の数の大型の大砲を持っていた。威力も凄まじかった。ほとんど戦にならなかった。逃げるのが精一杯で、味方と逸れ独りきりで敵の追撃におびえながらひたすら逃げて

いた。あの調子でいけば既に萩は落城しただろう。そうに違いない。狼狽している。みつともないほど慌てふためいている。そりゃあ、自分でも承知している。が、今いるここがどこか皆目見当もつかない。ゆえにやたら滅法逃げるほかない。今にも、その竹やぶから、幕兵がとび出て来るかもしれない。

落着け、落着け、自分に言い聞かせる。これからどうする？どうしたらよい？自問自答する。隊から逸れてしまい浮き足立っている。今、襲われたら、いかに腰抜けの幕兵相手でも負ける。冷静になれ、と自分に言い聞かせる。なれるかつ、と自分が答える。萩が陥落したのだ。多分。萩が・・・。

ずさあ、と足が止まる。そうだ・・・。萩は陥落した。立ち止まると、汗が噴出し、喉が激しく空気を求めむせた。立木に寄りかかり、そのままずると木の根に腰をおろした。

萩が陥落しても・・・。奇兵隊は徹底抗戦する準備がある。萩近郊の三角山や田床山といったところに味方の拠点がある。高杉はこうした事態に備え、彼方此方に隠し砦を築き縦横無尽にトンネルを掘っていた。

だが、どこへ行けば隊に戻れる？ まわりは幕軍だらけだ。生きてこの山を降りられるのか？

行く末を案じる時は・・・。不意に師匠の言葉が頭に浮かんた。小一郎は町人だ。奇兵になる前は花火職人だった。その師匠がよく言っていた。

行く末を案じる時は、来し方をよく考えてみることだ。まずは今まで起こったことを頭の中でよく整理してみて、初めて今後のよい道が開けるという意だ。

そうだな、という自分と、そんな悠長に考えている暇があるかつ、という自分がいた。かろうじて冷静な自分が勝ち、小一郎は大急ぎで来し方に取りかかった。

まずは、そう、黒船が来た。いや違う。そこまで遡ることはない。落ち着け。ちつとも豪胆にかまえていない。そうだ、高杉公が奇兵

隊の創設を打ち上げた。俺に関係あるのはそこからだ。俺はいの一番に入隊した。短銃の腕が良かったので本隊所属となった。自分でも不思議だったが、それまで触ったこともないのに意のままに的を撃ち抜けた。当時隊長だった赤根武人から、特別に二丁の短銃を支給された。

そこまでは、順風満帆だったのだ。長州が徳川の世をまさにひっくり返す勢いだったのだ。ところがじゃ。薩摩と会津が手を組みやがった。

京で政変が起こり、長州は窮地に立たされた。薩摩と会津が、長州を京から追い出したのだ。しかも、泣きつ面に蜂とはこのことだ。外国の連合艦隊が攻めてきた。攘夷決行の砲撃の報復に來たのだ。

米国はなんと軍艦二十隻を派遣した。海峡が軍艦で埋まった。圧倒的な武力の差を背景に、和平会談が持たれた。が、交渉は決裂し、米軍は三日で彦島を占拠した。

奴等の考えは御見通しだ。彦島を上海や香港のようにするつもりなのだ。イギリスに負けじと。

彦島は巨大な軍港を持つ要塞となり、下関は米兵相手の歓楽街のようになった。奇兵隊は、その米兵相手に徹底したゲリラ戦法で挑んだ。

来し方

奇兵隊は、戦況のなかで、自然、変化を要求された。奇兵の奇は当初正規軍に対しての「奇」であつたが、この頃になると、奇策の「奇」となりつつあつた。ゲリラ戦やテロの専門部隊として訓練され、装備もそれに伴つた物に替わつてきた。

ライフルでの狙撃訓練は勿論、市街地や森、洞窟内を想定した短銃を使った銃撃戦の訓練など。

なかでも特に鍛錬されたのが、短刀を使った格闘術。柔術と組合せた殺人術だ。

これは、町人出の彼には、非常に過酷な訓練だつた。何しろ、武芸のたしなみなどまつたくないから。けれど、その短刀は氣に入つた。

名を奇兵刀といい、刃渡りは30センチ程度。日本刀のように刃が反つてなく真っ直ぐで幅も太い。バランスがいいので投げナイフとしても使える。

そして、人食い牙。通称、牙と呼ばれている。大型の手裏剣のような物だが、殺傷力は手裏剣の比ではない。形はさまざまあつて、形状により使い道も違えば、飛ぶ軌跡も違う。

思う通りに飛ばすにはコツがいるやつだ。

さて、彼には遠い話だが、米国が幕府と接近するにつれ、英国が公にではないが長州に近づいてきていた。

英国は前年薩摩と戦争をし、それを機に急速に友好を深めていた。英国は、薩摩と同様に長州にもこの国の今後を変える力があると見たのかもしれない。または米国の介入を快く思っていないのか。その辺の真意は町人の彼には計りかねるが、大量の武器を供給してくれたと聞いた。

武器の密輸には、下関の勤皇商人白石正一郎が暗躍した。白石なら小一郎も知っている。

彼は奇兵隊の会計方であるばかりでなく、結成当初に宿舎を提供したこともある人物なのだ。

彼が英商人グラバーより調達した武器で、彼等奇兵隊は下関郊外で米軍と互角の戦いをした。奇策を用い、奇襲、待ち伏せ、闇討ち、高杉は勿論井上聞多、伊藤博文、山形狂介等の指揮で奇兵隊は戦果をあげてきた。

だが、泣きつ面に二匹目の蜂が飛んできた。

徳川幕府だ。長州征伐に乗り出したのだ。長州は四境を封鎖された。つまり、袋の鼠。

幕軍長州征伐隊の大將は井伊直弼。殺されぞこないのジジイだ。と言うよりも三度殺しても飽き足りない、攘夷論者にとっては四度地獄へ送りたい天敵だ。うち一度は地獄から来たに違いないという根拠からだ。

奴が米国の内政介入を許し、大量の武器供与を受けたが故、腰抜けどもあいてに、長州は苦境に立たされたのだ。

通商条約を締結した時から、奴は絵を描いている。米国の力を背景にした、徳川主導の開国。

そしてこの二月。

東の国境が破られ、幕軍が萩へ侵攻してきた。やむを得ず奇兵隊をはじめとする諸隊は萩郊外の苅田原へ急行する。（がため、下関は完全に米軍の手に落ちた）そしてそれこそが先の戦、苅田原の戦いである。

結果は述べた通り。おそらく幕軍はあの勢いのまま進軍し、萩はその手に落ちただろう。毛利敬親は桂の計画がうまく行っていれば、首尾善く朝鮮へ亡命したはずだ。かねてより、桂と高杉は話し合っていた。小一郎も聞き及んで知っている。朝鮮への根回しは桂が調える。そして長州窮地の折には藩主を朝鮮へ亡命させる。残った高杉は山中にこもり長州全土が焦土になるまで徹底抗戦する。

毛利父子さえ無事ならばいつの日か御家再興はなる。それが彼等の考えだった。

だが、と小一郎はふと思う。ここまで必死で駆けてきて、この場を逃れることのみ考えていた彼の心が逆方向を向く。

向いたとたんに、不思議と冷静になった。

だが、と町人出身の彼は思う。

民なくしてなんの国ぞ？

町は滅び、田畑は消え、耕す民もなく、藩主と侍だけ残った所でそれが国か？

見えた。行く末が。と、彼は思う。隊と逸れ、たった一人で行く事ではないかもしれない、が、俺は民の為に働こう。今後この国は夷人と幕軍に支配されどんな運命をたどるか分からない。だが出来る限りでいい、俺は民の為に戦おう。

その為には、まずは萩へ行く。萩へ行って様子を見る。昼間町人のふりをして行ってもよい。夜黒装束で忍び込んでもよい。まずは様子を探る事だ。

冷静になったおかげでもう一つ気付いた事がある。それはあれ程の激戦を潜り抜けて来たというのに、かすり傷程度の怪我しかしていないことだ。べったり付いていた血糊も人のものだったのだろう。彼自身は殆ど無傷に近かった。まだまだ戦えるのだ。弾もたっぷり残っている。

小一郎は鎧をうち捨て、帯に二本の奇兵刀と拳銃を挿し、人食い牙を牙袋に入れライフルと一緒に背負うと近くの里を探して山を下っていった。

水戸藩士

4・水戸藩士

しばらく行くと、山中の道なき道に、倒れている一人の男を見つけた。木の根を枕に虫の息で、全身血にまみれていた。小一郎の気配を感じ取ったらしく、男は弱々しい息の下からこう言った。

「里の者……濟まぬが助けてもらえまいか……礼はする……」

「

小一郎は男をよく見た。一見して幕軍と分かる。だが、下っ端ではない。立派な甲冑を着けている。ひよつとすると身分の高い侍かもしれない。

「助けるのは良いが、あんたの名は？」男は顔をあげる事すらかなわぬらしい。小一郎の声の方に向かって苦しげにこう言った。

「水戸藩士……鮎沢・伊予乃介。今、金はないが……必ず……」

こいつは天から降ってきた幸運だ。この男を殺し身包み剥いでこの男に成済ませば、萩の幕軍に忍び込める。だが、まで。知り合いに会った時はどうする？ 一目で偽者とばれるだろう。小一郎はすぐにこの考えを捨てた。もっとよい案が閃いた。この男の家来になるのだ。

「……残念だったな。目を開いて見るがいい。俺は奇兵だ」

小一郎の答えに男はギョツとしたように目を見開き彼を見た。二本挿しの奇兵刀、頭の鉢ガネ、背中の牙袋。それは紛れも無く奇兵隊独特の装備だった。男は短く息をつき、観念したように言った。

「殺せ……」

「いやだ。助ける。」おちよくっている訳ではない。本心からだ。

「何故……助ける？」

そうしたいからじゃ。小一郎はからかうように言った。

「敵に助けられて……生延びようとは思わぬ……殺せ……」

「ほう……。死にたいのか？ 始めは助けてくれといったじゃないか？ 里の者になら助けを求めるのか？」

「敵に助けられるわけには行かぬ……。武士の名折れじゃ……。殺せ……」男は繰り返すばかりだった。

「まあ、待て。考えよ。俺はお前の敵なのか？ それは俺かお前のいずれかがいずれ決めれる事であって、出会ってすぐ決まっているものなのか？ まあ聞け。確かにお前様は幕軍で俺は奇兵だ。お前の言う通り、敵ではある。じゃが、今の俺は、隊を逸れ一人じゃ。一人の人間としてお前の前におる。確かに、お前の首を取って隊へ戻れば俺は出世するだろう。だが俺にはもつといい考えがある。お前に頼みがあるのだ。お前にとっては地獄のようなものかもしれないが……。俺はお前を助ける。必ず元気にしてやる。命の恩人になつてやる。しかしだからと言って必ずしも俺の命令を聞かなくても良い。そこはお前の気持ちに任せる。無理強いはせぬ。どうじゃ？ まだ死にたいか？」

男が殺せの“こ”を発音する前に小一郎は恫喝した。

「武士じゃなんじゃという考えは捨ててしまえ！ おぬし生きたいのであるう！？ 嘘をついても無駄じゃ。わしも先の戦でいやと言うほど味おつたわ。愛する故郷を遠く離れ、今ここで、泥だらけになつて、会ったことも無い外道に切られ死んで逝くくらいなら、どんな惨めな、喜びなどひとかけらもない辛いばかりの人生でもかまわぬから、生きていたい！！ ただ、生きたい、また朝を迎え、おてんと様の下で生きていたい。そう願うた筈じゃ。違つか！？……俺は、戦のたびにそう思うとる……」

短い沈黙の後、伊予乃介と名乗る男は「……頼む……」とだけ言った。

山の翁

5・山の翁

山深い人里離れた山中にたった一人で暮している老人がいた。風変わりな爺で小さな畑を耕し、片手間に口クロを引いて暮していた。名を晴蔵という。小一郎と伊予乃介が彼の小屋に厄介になって一ヶ月が経とうとしていた。

始め、転がり込んできた小一郎に老人は聞いた。奇兵が幕兵を助けて何をするつもりだ？

小一郎は、策がある。だが、奴が断わるなら無理強いはせぬ。奴の気持ちにまかせるつもりだ。と、答えた。老人は深くは詮索しなかった。

この一ヶ月、小一郎は出来得る限り、というよりも、これ以上ないほど、伊予乃介の世話をやいた。彼は二発の弾丸をあびていた。一発は大腿に当り肉を裂いていたが、弾は貫通していた。もう一発は左胸にあり一番下のあばらを折りそこに留まっていた。これは医者が必要だ、と思ったが、もとより望むべくもない。短刀を火であぶりよく殺菌し、傷口に焼酎を噴きかけ、弾をほじくり出した。伊予乃介はよく堪えた。次ぎに折れたあばらだが、どうしたら良からう、小一郎は老人に聴いた。傷の様子を覗きこんで言うには、指を突っ込んで元通りの場所に引っ張り出すしかあるまいとの答えだった。ふむ、と小一郎は頷き、伊予乃介殿、一度は死んだ命とお思いくだされ。そう大声で怒鳴ると、間髪おかず、へし折れたあばらに小指を引っ掛け、もとあったと思われる場所まで引っ張りあげた。これには伊予乃介も悶絶し意識を失った。死んだか？一瞬小一郎は不安になり呟いた。いやいや死んではおらぬ。それよりも、よう肺を傷つけずに済んだものじゃ。もし傷つけておれば、今頃血を吐いて悶え苦しんでおるじやろう。そうなっておらぬのが無事な証拠じや。老人の言葉を聞いて小一郎はほっと安堵した。じゃがこれから

が大変じゃ。三日から五日が山場じゃろう。なによりも安静にのう。老人はそう言うつと畑仕事に出ていった。

小一郎は丁寧に包帯を巻きながら、先刻短刀で弾を穿り出したときの、昨今の武士とは思えぬ伊予乃介の気丈ぶりを思いだした。こいつはとんでもない強い男かもしれんと。

それから彼は、それこそほとんど付きつきりで看病した。始めひどい熱が出た。夜通し額の手ぬぐいを替え、寝着を替え、汗を拭いてやり、常に清潔な包帯と取り替えてやった。また、水は必ず一度沸騰させたものを人肌位まで冷まして与えた。

老人の言つた通り、五日を過ぎると熱が引いてきた。意識はまだ朦朧としていたが、粥くらいなら少し口にする事ができるようになった。爺、貴重な米を済まぬ。小一郎が言つと、老人は、なあと、気にする風もなかった。小一郎が詫びたのは、老人が普段芋しか食べていなかったからだ。米がどれほど貴重な物が察しがつく。勿論小一郎も芋しか食べさせてもらえない。

老人は薬草を何種類も山から取ってきた。これはよく煎じて飲ませなさい。これはすり鉢で擦って傷口に塗りなさい。と、一つ一つ教えてくれた。

ある日の夕刻、小屋の外に出て小一郎はびつくりした。小屋の裏側に数え切れないほどの狸が集まってきているのだ。老人は芋を放りながら、こやつ等は餌付けしとるでう、毎晩こうして餌をやるんじゃ。と言つた。餌といつても、ここでは人間の食い物と同じ物である。思わず勿体無くは無いか、と聞いた。すると老人は、なあと、時々火縄で撃つてご馳走になるで。御互い様じゃ。そりや、一匹撃つとしばらくは寄りつかんようになるが、そのうちまたぞろぞろやって来る。

なあ、思わんか？こやつ等は民の姿と同じじゃ。痛い目を見てもいつしか忘れてしまう。

「晴蔵じい、おぬしは何者だい？なかなかうがつた事を言う」老人の言葉が逆の意味だと小一郎には判つた。「なあと、ただの陶工さ

ね」晴蔵は軽く答えた。

翌朝、囲炉裏端で眠っていた小一郎は、人の気配に目を覚ました。ふりかえると、伊予乃介が布団の上に身を起している。意識ははっきりしている様子だ。ここに来てから初めてのことである。目があるって何とはなしに沈黙してしまった。

「名を聞いて……なかったな……」

「小一郎だ。……町人ゆえ性はない」そして、寝ている老人をあごで指し「晴蔵という、親切なじじいだ。ここは彼の小屋だ。」

伊予乃介は布団の上に居ずまいを正し、小一郎殿、こたびは誠に……と言いかけて臥おれた。まだまだ起きてはいかぬ。寝ておるがよい。小一郎はそう言っ**て**彼を横にならせた。

「すまぬ」と伊予乃介は言う。

「なあに」と晴蔵の口癖を真似た。「そうだ、喉が乾いてはいぬか？ 水を持つてきてやろう」そう言っ**て**湯冷ましを急須に汲んでき**て**与えた。

「いろいろ聞きたい事はあるが、まずは寝ることじゃ。あばらがつくのに一月はかかる。心配せずとも語る時間はたっぷりある。故に、今はまだ何も考えずに養生することじゃ」

回復

6・回復

一ヶ月が過ぎた。

伊予乃介は起きて歩けるほどに回復した。今では時折庭に出て、右手一本で剣の鍛錬などしている。しかし回復すればするほど、その立ち居振る舞いや何気ない所作などに気品と威厳を感じさせる。本物の侍である。伊予乃介と膳を囲むと、小一郎はもとより晴蔵までも背筋がピンとのびる思いであった。

裏の狸はもう来ない。お陰でこのところの夕餉はずっと狸汁である。

ところで、肝心なことを二人ともまだ口に出せないでいた。伊予乃介は切り出そうとしてなかなか切り出せない。小一郎のほうは気にも留めぬ様子で、晴蔵のぼろい登り窯の窯出しの手伝いなどしている。

ここにいとまるで、戦のことなど別世界の出来事のようなのである。ただ、淡々と日々が過ぎていく。

だが、ある夜、思い詰めたように伊予乃介が切り出した。

「小一郎殿、そなたは拙者を助けてくれたときの事を覚えておいでか？そなたは拙者に頼み事があると言った。そろそろ教えてはくれまいか？そなたの目的を」

焼きあがった茶碗を上げしげと眺めていた小一郎は、ふむ、と向き直り、だが目は茶碗から離さず気のない素振りを装いこう答えた。

「貴殿の・・・家来になりたいのじゃ」

「奇兵隊を抜け幕軍に入りたいと申すのか？」

「そうじゃあない。逸れたとは言え俺は奇兵だ。そこは違わぬ」

一拍おいて、小一郎の真意を理解した伊予乃介は真っ赤になって憤怒した。

「そつ、そなたは、わしに内偵になれと申すのか！？」

「察しがよいのう。そのとおりじゃ。貴殿なら幕軍の駐留する萩城へも自由に出入りできようし、重要な話も聞けよう。俺は貴殿の家来としてそこについて行く。どうか？」

「言語道断にもほどがある。敵の内通者となる位なら、せつかく助けていただいたこの命、もつたないが今この場で腹を切る」

「まあ待て。俺は奇兵には違いないが、隊に戻るあてはない。俺独りで、伊予乃介殿が手伝ってくれるなら二人で、民を守るために働きたいと思う。それに無理強いはせぬと言った筈じゃ。イヤなら断ればよい」小一郎はあくまで淡々と答える。伊予乃介は「うーむ」と唸り、拙者にも拙者の志がある。と言い、しばらく黙り込んだ。「民を守るためと言うがいったい何をどうやってそれを成すつもりだ？」

「それよ」小一郎は正直なところを述べた。「実はまだ分からぬ。萩へ行ってみないことには情勢がどうなっているのかも分からぬゆえに。が為に、貴殿の家来となつて萩へ入りこみたい。いずれ御用金の運搬や、賄賂の受け渡しなどの情報が入ろう。その金を盗み取つて困窮する民にばら撒くのも手かと思っている」

「きつ、きつ貴殿は」小一郎は泡を吹くほど猛り狂つた人間をはじめて見た。

「強盗の片棒を担げと言うのかっ！！」伊予乃介は今にも卒倒しそうな勢いだつた。

そこへ大笑いしながら割つて入つたのが、先程から黙つて聞いていた晴蔵である。

「わつはつはつはつ、可笑しな話よ。頼むほうも頼むほうなら、悩むほうも悩むほうじゃ。伊予乃介よ。そなたはただ「引き受けた」とのみ答えて萩へ連れてゆき、幕使にこの者は奇兵じゃと引き渡せばよい。それだけの話じゃないか？ 違つか？」

伊予乃介と小一郎が同時に答えた。

「それはできぬ」「それはできんじやろう」

小一郎が続けた。

「それができる男なら助けはせぬ。たとえ見込み違いで初め助けたとしても、途中で殺すか、殺さぬまでも打ち捨てて去ったわ」

晴蔵が問う。

「じゃが、奇兵隊には隊則があるう？盗みを働いたものは……」
「盗みを働いたものは死罪だ」他人事のように小一郎が答える。

「つまりお前さんは、幕軍に捕まっても死罪、米軍に捕まっても死罪、なおかつ隊に帰れぬどころか、命を賭した仲間の奇兵隊に捕まっても死罪というわけじゃ……。その覚悟はできて居るのか？
しかもそれは伊予乃介にとっても同じことが言える。彼にもそれを強いるのか？」静かに晴蔵は問う。

「ゆえに、無理強いはせぬ」

長い沈黙の後、晴蔵は笑って言った。

「ふおおふおお、まあよい。まずは二人で里へ降りてみることにしよう。そこで何がおきているか、自らの目で見て確かめてから判断しても遅くはあるまい。わしは長いこと生きてきた。こんな山奥にあつても、下界の事が手に取るように分かる。今度の戦は昔ながらのそれとは違う。小一郎よ、ひとつ聞くが、奇兵は何者であるか？いや、何の集団であるか？」

「奇兵は……」小一郎は老人の問いの真意を測り、答えた。義勇軍？ 革命軍？ 否、

「奇兵は民兵の集団だ」

「然り」晴蔵は満足げに頷きながら言った。

「つまり奇兵とは民じゃ。と言うよりも民が混ざつておると言ったほうがよい。幕軍に民と奇兵の見分けがつこうか？ また、奇兵のほうもそれを逆手に取った戦略をとるだろう。確かに言えることは唯ひとつ。古来、戦のたびに最も苦しんできたのは民じゃ。じゃが、此度の戦、これまでとは比べようもないほど民をいたぶるじやろう。まずは里へ降りてみることにじゃ。小一郎よ。お前さんはたった一人でいかにして民を救う？」

「……」方策は無い。小一郎にも皆目見当がつかない。この

広い長州の民を、幕軍から、夷敵から。一体自分に何ができる？
まったく無力か？ そうは思いたくはなかった。たとえ、それに近いとしても……。

沈黙を破ったのは伊予乃介だった。

「萩までだ。そこまでは同行する。身の安全も保障する。後は自由にすれば良い。私にできるのはそこまでだ」

出立

7・出立

小屋を出る日、晴蔵が茶を点ててくれた。

伊予乃介は勿論だが、晴蔵までもが、普段からは想像できない見事な作法だった。小一郎は胡坐をかいて座り、茶碗を鷲掴みにしふうふう冷ましてがぶ飲みした。

「喜左衛門井戸と言う茶碗を知っておるか？」晴蔵が座をくずして語る。

「京の紫野大徳寺の弧蓬庵にあり庶民はけっして見ることのかなわぬ茶碗じゃ。天下随一の茶碗だと呼ばれておる。いわば国の宝のひとつと言つてよい。じゃが、その茶碗は大抵の名器と呼ばれる井戸がそうであるように、朝鮮の名もなき貧しき陶工の作った物だ。別に意を凝らして作ったわけではない。茶を飲むために作ったのではない。飯茶碗じゃ。同じように貧しい農民の用として、大量に作られた安物のひとつじゃ。驚くかの？ 天下の名器の生い立ちは今語ったとおりじゃ。じゃがの、どんな名人が如何に苦心してもその器を越えることはできぬ。どんな名工が苦心惨憺して作ろうとも、その井戸の足元にも及ばぬ。解るかの？ 作為が生まれるからじゃ。そこに作為があれば如何によく似た茶碗を作ろうともその足元にも及ばぬどころか逆に卑しいものになる。判るかの？」

伊予乃介が晴蔵の茶碗を手に取り、「この茶碗にも七つの見所がある。良い井戸の条件を適えておるのでは？」と、問うた。

「それこそが作為よ」晴蔵は意を得たりと上機嫌で語る。

「そもそも、条件とは何じゃ？ それはわしが、こうしてやろう、ああしてやろうと作ったものじゃ。良いといわれる条件を満たしてやろうと作ったものじゃ、それこそが作為よ。どうじゃ？ 良い茶碗じゃろ？ 立派な姿じゃろ？ と、器が語っておる。そんな器は鼻持ちならない。いわば高慢ちきな器じゃ。卑しい性格じゃ。最も

美しいものは、不作為の境地から生み出される」晴蔵は一呼吸おいて続けた。

「どんな名工も敵わぬ、最も美しいものを作ることができるのは民じゃ。民は民であるが故、無欲であるが故に奇跡を起こすことができる。そして、が為には何かを成そうとしてはならぬ。始めからこうしてやろう、ああしてやろう等と思つてはならぬ。ひとつひとつ、出来事を創りあげていくことじゃ。それがいつしか、凡人の成し得ぬ仕事に結実してゆく。そういうものじゃ」

初めは老人のただのうんちくだと思つて聞いていた二人も、晴蔵が何を伝えたかったのか理解した。

虐殺の村

萩へ

1・穢れなきままに

小一郎は世話になった礼にライフルを置いていった。わしは火縄の方が慣れとるんじやが、と晴蔵は言っていたが、新しいおもちゃを貰った子供のようになり、ガチャガチャとあちこちいじくりまわして喜んでいた。

伊予乃介は綺麗に月代を剃り上げ鬘を結び、立派な武将姿となった。小一郎は長髪を後ろでくくり、奇兵刀や牙は隠し持ち、幕兵を装った。ふたりのそのいでたちをは、誰が見ても、えらいお侍とその従者といったところか。

立ち去りがたい思いのなか、二人は厚く礼を言つて、翁の小屋を辞した。

さて、小屋を出てずっと山を下っていくと、行く手に集落が見えた。咲き乱れる桜の花のなかひっそりと静まりかえるその村は、虐殺の里であった。

村の入り口に赤子が土壁に叩きつけられて死んでいる。頭が割れている。そばに母親らしき女が内臓をえぐり取られて死んでいる。身重だったのか、肉の塊の中に胎児らしきものが見てとれる。歩を進めれば同じような遺体がそこかしこに横たわっている。首だけになった者が、道端に転がっている。木の枝に吊るされた者もある。女たちはことごとく乱暴されたあと殺されたようである。幼い少女の遺体もあり同様である。中でも一番酷かったのは、村の中央の広場にあった遺体である。一目で輪姦されたことが判る。それも五・六人ではないだろう。少なくとも二十人はいたはずだ。拷問に近い否、それ以上の目に逢わされている。顔の形が残らないほど殴られたか蹴られたかしている。はだけられた胸から下腹までこれでもか

と言つほど突き立てられた刀傷が残っている。歳の頃なら十二・三であるだろう。

人の為した業とも思えぬこの光景に、伊予乃介はしゃがみこんで嘔吐した。侍の彼には到底理解できぬ獣の所業であつた。小一郎とて、あまたの戦場を見てきたがこれ程の殺戮を目にしたのは初めてだ。

「いったい何者が……」呻くように伊予乃介が言った。

「決まつておる。……幕軍だ」

「馬鹿な……」伊予乃介は否定したが、小一郎は今ようやく、晴蔵の言つた言葉の意味が分かつた。奇兵が山中に立てこもり戦うなら、当然その兵糧は近隣の里の者の援助を得なければならぬ。幕軍が奇兵を叩くなら一番効果的なのは民を根絶やしにすることだ。また、一口に奇兵隊と言つても、大小二百近い諸隊があり、中には村落単位で結成されているものも多い。農兵隊と呼ばれるものだ。この村がそうであつた可能性も無いとは言えないが、それにしては交戦の跡がみえない。故に前者の考えに基づく作戦の犠牲者である可能性のほうが高い。

「幕軍と言つてもお前のような侍ばかりではないだろう？」小一郎は静かに問う。

「将は侍であっても、下っ端はかき集められたごろつきばかりじゃないのか？ その侍も天下泰平に慣れきつて、部下も統率できないような腰抜けばかりじゃないのか？」

「だが、……このような事は……あり得ない、否、許されぬ……」伊予乃介は反論するが、その声に力はない。

その時である。村を見下ろす山の草陰に、何者かの動く気配がした。

「子供じゃ！」小一郎は脱兎のごとく駆け出した。「生き残りがいるぞ！」

一日前の事である。村はいつもと変わらぬ平穏な午後を迎えてい

た。そこに二十人から三十人の兵隊がやって来た。奇兵あらためである、と口々に言いながら、片っ端から人を切っていった。母親の手から赤ん坊をもぎ取り壁に投げつけた。赤ん坊の頭は砕け、土壁にべつとりと血の跡がついた。男たちは手に手に鍬や斧を持ち必死に戦ったがむなしい抵抗にすぎなかった。

異変のなか、2人の少女が納戸に隠れ潜んでいた。姉の多津と妹の千鶴である。外の様子は見えない。物音だけが聞こえてくる。初め男達の怒声や罵声が聞こえていたが、それが終わると女達の悲鳴がえんえんと続いた。幼い千鶴はともかく、年上の多津には今外で何が起こっているのか見当がついた。嘆願する声、命乞いをする声、やがて悲鳴は聞こえなくなり、兵隊たちが大声でしゃべる声と、下卑た笑い声が聞こえてきた。あちこちの家に押し入り家財をひっくり返して金目のものを探し始めた様子だった。ここには危ないと、とつさに多津は思った。見つかるのは時間の問題だ。しかもここで見つければ逃げ場が無い。今のうちに一か八か外へ逃げるしかない。

「いいかい」多津は妹の肩を抱いてささやくように、しかし一言一言しっかりと言い聞かせた。「よく、お聞き。おとうもおかあも殺された。わかる？ もう二人きりなんだ。怖いだろうけどここを出て逃げるしかない。いい？ もし見つかったらお姉と反対の方へ逃げるんだよ。そうしてすぐ裏の山へ入っていつも行っている小道を通って庄屋さんの屋敷まで逃げるんだ。そうすれば必ず助かるからね。いい？ わかるね？ お姉と反対の方へ逃げるんだよ」多津は数えで十五になる。もし見つかって二人がそれぞれ反対の方向へ逃げたとしたら、兵隊たちは必ず自分の方を追ってくるだろう。妹を助けるには他に方法は無い。多津は悲壮な決意を固めた。最後にしっかりと千鶴の体を抱きしめた。二人とも小刻みにふるえている。目に浮かんだ涙をぬぐい、「お姉が守ってやるからね」と言った。姉の口調からわずか四歳の千鶴にも、何か大変な恐ろしいことが起こっていること、そしてそれから逃げるには、姉と反対の方向へ逃

げなきやいけないこと、それだけは絶対に守らなきやいけない大事なことだと理解できた。

二人は、手に手を取りあい、ゆっくりと物音を立てぬように小屋から抜け出た。家の陰づたいに、気づかれないように、裏山へ少しづつ少しずつ近づいて行く。あと少し、この空き地さえ横切れば裏山の藪の中だ。ひよっとしたら助かるかもしれない。多津に希望がわいてきたその時である。「娘がいるぞお」後ろの方から兵隊が叫んだ。

「千鶴！走るんだよ」多津は妹の肩を叩き駆け出した。

千鶴は約束どおりにした。姉の駆け出した方向をみて、その反対の方へ。多津が、村の広場の方へ駆け出したから、千鶴は山の方へ。すぐに笹藪のなかに逃げ込むことができた。そのまま無我夢中で走り、山の中腹まで駆け登った。息が切れ、もう走れなくなるまで走って、後ろを振り返った。村が遠く見下ろせた。

お姉、逃げられたのだろうか？ どうして広場の方へ逃げたのだろうか？ 急に心配になった。千鶴は言いつけを忘れ、村の方へ下っていた。村に近づき山の中から、広場がよく見わたせる場所に出た。そっと、藪のなかから覗き込むと、広場には三十人近い兵隊がぐるりと輪になっている。多津はその真ん中に押し倒され、一人の兵隊が多津の上にのしかかり乱暴に押さえ込んでいる。遠く風に乗って多津がすすり泣く声が聞こえて来る。周りにいる兵隊が、その間中、顔といわず腹といわず、力任せに蹴り上げる。一人の兵隊が終わると、次の兵隊が多津にのしかかる。それがえんえんと続く。

一人、二人、三人……。千鶴はまったく動けなかった。最後まで。ただ見ていた。一人の兵隊が刀を抜くと、太陽の光を受けキラリと光った。兵隊はその刀を何度も何度も多津の体に突き立てた。突き立てるたびに刀がガラガラと光った。千鶴はまったく動けなかった。すべてが終わり、静寂が訪れた。ゆっくりと日が暮れて、あたりが暗くなっても千鶴は動けなかった。夜が更け、朝が近づき、朝靄が立ち込め、日が昇り始める。その間、ずっと千鶴は身じろぎ

ひとつせず、その場所にいた。彼女のなかを、静寂が支配していた。悲しみや怒りが、感情であるならば、幼い彼女のなかでそれらのものは絶えいるうとしていた。ただ、恐怖のみが、人間の精神のなかで、感情とは別の次元に位置するらしい。彼女は、まるで野生の動物のように敏感になっていた。が同時に、自分が風に溶け込んでいくかのようにも感じていた。それらは、自我崩壊の最初の兆候だ。

陽が高くなり二人の侍がやって来た。一人が彼女に気づき追ってきた。必死で逃げたが追いつめられた。彼女はただ怯えるばかりだった。噛み付いてやるとか、引掻いてやるとか頭の中に浮かんでも、実際には怯え慄くばかりだった。男は彼女を抱き上げ、あの恐ろしい村の広場へ連れて行った。「いったい何があつたんだ?」「もう大丈夫だ」「誰がこんな酷いことをした?」二人の侍は口々に言つたが、それらの声はどこか遠いところで響いているようだった。彼女はかわいそうな多津のそばにペタンと座り、でも、その姿を見ることは出来ず、顔を背けうつむいたまま、ただ多津の着物の裾を握り締めじつと離さなかった。

「この娘子は、……おそらくこの子の姉だろう」

「ああ、……そして、命を懸けてこの子を守つたんだ」子供の様子から、伊予乃介と小一郎にも大体の事情は想像できた。見れば小一郎はボロボロと泣いていた。顔をクシャクシャにして泣きながら、「武士という者は不憫よのう。人前で泣けぬとは……」唇を噛み締めている伊予乃介に同情するかのように言つた。

「男は、であろう……?」伊予乃介は、ぼそりと言って続けた。

「俺は、……俺は、……絶対に許せん。必ず下手人を暴いて裁きの場に引きずり出してやる。……奴等は、兵士ではない。虐殺者だ。……こんなことが許されてよいわけが無い。俺は萩へ行き大老に訴える。必ず下手人を割り出し裁きの場に掛けてやる……」
しだいに憤慨し声を荒げた。憤る伊代乃介をよそに、小一郎は鍬を拾つて来て、広場の真ん中を掘り始めた。問われて答えるには、

「この子の姉の墓を造つてやる。全部の遺体の始末は出来ないが、せめてこの娘子だけは弔いたい」

伊予乃介も手伝った。ほどなく、野犬に荒らされぬ位深い穴が掘りあがり、二人は娘の遺体を清め、綺麗に着物を着せてやり、そつと穴の底へ横たえた。生き残りの子供は一言も喋らずじつと見ていた。ところが上から土を掛けようとすると、半狂乱になったように穴の中にとびこもつとした。伊予乃介が抱き止めると「多津、多津」と、悲痛な声をあげた。

「そうか、お前の姉はたづというのだな。よしよし、辛かろうが、お別れじゃ。致し方ないことじゃ。辛抱いたせ。この仇はきつとおじさん達が取つてやる・・・」なだめながら、伊予乃介は子供が握り締めている物に始めて気がついた。それは、粗末な木の口ザリオだった。

ここは、キシタンの里であつたか。二人は顔を見合わせた。その様子に子供も始めて自分の手にあるものに気付いた様である。「多津の・・・」おそらく最後に抱きしめられた時、握られたのだらう。あの時は恐怖のあまり気付かなかつたが・・・。

「そうか・・・。姉さんの形見なのだな?・・・大事にいたせ。姉さんはデウス様の許へ召された。辛かろうが辛抱して見送らねばならぬ」

大きな土饅頭が築かれ、天辺に小一郎は墓板を立てた。そこには、墓碑銘の代わりに、

心優しい娘、たづ、ここに眠る。その身も心も穢れなきままに・・・と、書いた。

庄屋屋敷

2・庄屋屋敷

「うひゃあ！こりゃあどうしたことだ！？」背後から素つ頓狂な声が聞こえてきた。みれば小作人らしき大男が村の入り口でびっくりして立ち尽くしている。

「ぬしは近隣の里の者か？」伊予乃介が問うと、

「へい、下の吾野郷の庄屋屋敷で下働きをしております作蔵と申します」作蔵と名乗る男は子供の姿に気付き見知っていたらしく、叫んだ。

「千鶴！千鶴ではないか。無事であつたか。なんと助かつたのはお前さんだけかい！？」

「そうか。この子の名は千鶴と言うのか。よほど恐ろしい目にあつたのだらう。ほとんど口がきけぬ」

「なんとまあ、かわいそうに・・・」二人から大体の事情を聞くと作蔵は言った。

「やはりそうでしたか。実は昨日のことでした。幕府の兵隊さんたちが奇兵検めに私どもの村へ参りました。部隊の隊長様は、豊永殿と申しましたか。その方は私共の屋敷に留まり、配下の兵隊さん達が三手に別れて近隣の村々の探索に出かけられました。夕刻、そのなかの一隊が血に塗れて戻ってこられて、上の村に奇兵の潜む里があつた。村の衆全員が武装し抵抗したので、皆殺しにしてきたと、言っておりまして。そこで心配になりました。こうして様子を見に参つたのでございます」

伊予乃介は憤慨した。武装し抵抗したと？この娘子が奇兵だつたと？このおなご達がか？身重のこのおなごが武器を手に抵抗したと？一体この惨状のどこを検分すれば、交戦の跡が見られるというのだ？一氣にまくし立てると、一息ついて自らを静め、続けた。

「ともあれ、ぬしの村に連れて行ってくれ。ぬしのあるじにその部隊のこと、もつと詳しく聞きたい」と言った。

「へい、承知しました。それに・・・ここを片付けるにはもつと人手がいりそうだ。人足を集めにやらんし、村までご案内しましう」

出立の為、小一郎が千鶴を抱き上げようとすると、彼女は怯えてその手を逃れた。伊予乃介、作蔵が試みても同様である。仕方なく歩を進めると、少し遅れたところをトコトコついて来た。

村へ向かう道中、作蔵と名のる男は色々と聞いてきた。千鶴には姉がいたんですが、助かったのは千鶴独りで？

「多津という娘のことじゃな？ その娘が、己が命と引き換えに妹を守つたらしい」

「他には誰も？」

「ああ、そのようじゃ」もっぱら伊予乃介が答える。

「ところでお侍さんたちは幕軍の方で？」

「我らは、」と、伊予乃介が答えるのを遮って小一郎が代わって答える。

「この方は、水戸藩主じきじきの命を受け、長州国内の内情を視察に来た鮎沢様と申す。私はその家来の小一郎である」二人が幕軍直属の者でないと聞くと、俄然作蔵は饒舌になった。

「近頃はこのようなことばかりでございます。まあ、これ程酷いことは初めてでございますが、奇兵検めと称しまして強盗まがいのことや、人殺しなどごく普通にまかり通っております。なにしろ、ここはもう長州国ではないものですからなあ。お武家様、どうか幕府の偉い方をご存知でしたらご報告頂けませんでしょうか？」小一郎は聞き返す。

「もう長州国ではないと申したな？ それは一体どういうことだ？」作蔵がご存じないんですかい？と、逆に驚いて説明する。

「先に萩城を占拠された井伊大老が申されました。この国にはもはや藩主は無し。故に国とは呼べぬ。没収して徳川家の暫定天領とす

る。」

やられた、と、小一郎は悔しがる。藩主亡命がかえって仇になったか。

「じゃが、まだ奇兵隊を始め諸隊の抵抗があるうに？」

「へい、ですから今、萩は混乱の極みでございます。奇兵隊は萩本陣の裏山に隠れ潜み、二日とおかず萩へ攻め込みます。夜毎、幕軍と奇兵の小競り合いの繰り返しです。町民のなかで金のある者は、毛利様を追って朝鮮へ船出する者もいます。ですがその船は漁船に毛の生えた程度の物で、とても朝鮮まで、いや、対馬までも辿りつけますまい。そうでなくとも、幕府の軍艦に見つかれば国抜けの罪で片っ端から処刑されているということです。商人のなかには、早々と見切りをつけ、幕府に取り入ろうと賄賂を贈るものも多いようです。逆を言えば、そうでない商家は、非道い目に遭わされておると聞きます・・・」

小一郎はもつと詳しく聞きたかったが、程なく庄屋敷へ到着した。既に陽はかげり夕闇が訪れていた。

出迎えた庄屋は二人に酒を振舞い、下にもおかぬもてなしをした。私の知り得る限り、あの部隊の隊長殿は豊永志功忠光殿と申され、ご立派な方でした。と、言った。伊予乃介が、忌憚ないご意見を聞かせ下され、己は動かず詮索を部下任せにし、しかもその一隊が一村を殲滅せしめたというのに検分すらせぬ。それが立派な将の為すことかつ、と恫喝すると、いや、実を申しますと、いかにも役人風情の方でして、上ばかり向いておると申しますか、ご自身の出世のみ考えておられる様な方でして私はどうにも虫が好きませんでした。と言ひ、とは言え当方もそれ以上は存じませぬし、もう夜が遅いゆえ更に詳しく話は明日にして、どうぞお休み下され。と言った。

二人はなるほど思った。己が出世の為に罪のない村を殲滅し奇兵であつたと偽り手柄としようとしたのかも知れぬ。二人が顔を見合わせていると、処で、と庄屋が切り出した。千鶴のことで御座いますが、もしよろしければ当方で引き取り面倒を見ましよう。小一

郎が渋い顔をしているのに気付かず、伊予乃介は、それは願ってもないこと、このような裕福な屋敷で育ててくださるのであれば異論はない。と答えた。

やがて夜具が用意され、二人と千鶴は別々の部屋へ案内された。小一郎は女中に、書きものをするので、と言い、行灯と油壺を持ってこさせた。

伊予乃介と小一郎は眠らなかった。まず、伊予乃介が問うた。

「なぜ、あのような偽りを申した？ 水戸藩主の命で長州視察をしておるなどと」

小一郎は、諭すように答えた。

「なぜなら、この村が奇兵に与しておるか、幕軍に通じておるか、いずれとも言い切れぬからじゃ。奇兵に与しておるのであれば、今宵我らは襲撃されるであらう。幕軍、例の豊永なにがしに通じておるのであれば千鶴の命が危ない。虐殺の生き証人を生かしておかぬであらうから。俺の考えすぎであれば、今宵ただの徹夜に終わる」「やれやれ、今日は穴掘りでくたび果てたと思ったが、夜も眠れぬとは・・・」伊予乃介は嘆いたが、予想していた通り、と言った口調だった。「では、私が千鶴の部屋の前を守ろう。離れた部屋へ案内されたのも、いずれかが襲撃目標で、いずれかが違うということか」

「うむ、千津を頼む。俺はここで襲撃を待ち伏せる。何も起こらなければそれで良い・・・」

伊予乃介が部屋を出て行った後、小一郎は身支度を整え、二丁の拳銃に弾を込めた。牙袋から人食い牙を取り出し、蝙蝠と呼ばれる物を腰に、三日月と呼ばれる物を肩に装備した。蝙蝠はその名の通り羽をひろげた蝙蝠の姿に似ている。三日月はそのまんま三日月型だ。左右両肩のたすきに四枚ずつ挟み込んだ。こうしておけば、肩に手を伸ばせばすぐに牙を放てる。部屋は六畳の広さ、上に床の間、下に襖、おそらくその先は同じような部屋があるのだらう、一方が障子戸で、その先は廊下で庭に面しているが、雨戸が閉められている。

つまり袋の鼠だ。どう戦うか、小一郎は頭のなかでシュミレーションする。二丁の拳銃に弾が十二発、最初の瞬間にこれで十二人倒せるか、両肩に計八枚の三日月の牙、これで最大限倒せても二十人。後は、腰の蝙蝠と二本の奇兵刀で切り抜けねばならぬ。敵が真の奇兵隊、つまり数多ある諸隊ではなく小一郎がもと所属していた奇兵隊本隊であれば生き延びるのは困難、間違いない殺される。そうでなければまだ分はある。帯に二本の奇兵刀を差し、手には拳銃を握り締め、小一郎はじつと暗闇の中で身を潜めていた。

一方、伊予乃介は千鶴の部屋の前まで来ると廊下にどっしと胡坐を掻いて座り大刀を抱いた。そのままじつとしてっていると、障子がスツと開いて、小さな頭がチョコンと不安げに顔を出した。

「どうした？ 眠れぬか？ 悪い人が来ないよう見張っておるゆえ安心して眠るがよい」そう言うのと初めて、本当に初めて、千鶴は少し微笑んで、部屋へ入っていった。思えばあの子は今日一日、怯えているか緊張しているか、いずれかの表情しか見せていない。初めて伊予乃介に心許したのか。理由は分からぬがこの人達は自分を守ってくれる、それが理解できたのかもしれない、初めて子供らしい顔を見せた。その愛らしさと、父母を殺され姉を虐殺された不憫さに、伊予乃介、この子だけはなんとしても守り通す、と心に誓った。

未明、静かな屋敷のなかで銃声がたてつづけに響き渡った。

牙使い

3・牙使い

時は少し戻り、小一郎の部屋である。じつと身を潜める彼の耳に、大勢の人間が足音を忍ばせて蠢く音がかすかに聞こえてきた。来たか、一瞬で体がこわばり緊張する。耳の横の血管がドクドク脈うち物音が聞き辛く苛立つ。焦りながらも、静かに動き、部屋の両の入り口にたつぷりと先程持つてこさせた油をまいた。畳に襖に染み込ませる。やがて足音は部屋の外で止まり、大勢の人間の息を潜めている様子が手に取るように伝わってきた。

行灯の火をそつと畳にうつした時、彼の心は平静を取り戻していた。燃え広がる炎を前に、拳銃をかまえた。

ワツと時の声があがり、燃えさかる襖がガラツと開かれた。その瞬間、飛びこんできた人影に立て続けに弾を撃ち込んだ。続いて開いた障子の向こうにも撃ち込んだ。計十二発で、九人倒した。「上々」と呟くと、両肩の三日月をとばし、さらに踏み込んできた四人を倒した。その間わずか数十秒、強いとみるや襲撃者たちはたじろぎ一瞬ひるんだ。その隙をのがさず炎をまたぎ廊下へ躍り出た。踏み込むと同時に左右の敵に三日月をとばす。いずれとも敵の顔面を割り、血が迸る。小一郎は雨戸を蹴破ろうとした、そこへ大刀を振りかざした男が奇声を発しながら向かってきた。すかさず二本の奇兵刀を抜き、大刀に対峙するかまえをとった。すなわち、逆手、俗に言う女子握りではなく、順手で、だが刀の峰が敵の方を向くようにかまえ、振り下ろされた刀を、交差させた二本の奇兵刀の峰で受け止めた。勿論、力任せに打ち下ろされた刀をこの小刀で受け止めきれるとは思っていない。器用に手首をひねると、ものの見事に敵の太刀筋は体の右側へ流れた。間髪おかず、鍛えに鍛えぬいた右足で地を蹴り相手の懐にとびこみ、がらあきになった腹へ右の奇兵刀を突き刺した。次の瞬間には左足を軸に敵の背後に廻りこみ、前に

のめった敵の喉を左の奇兵刀で掻ききった。廊下の襲撃者たちは手が出せず小一郎を遠巻きにして動くことができない。その様子を睨みつけながら、小一郎は雨戸を蹴破った。ところがなんと、外には無数の松明がゆれ、村人たちが庭を埋め尽くしていた。くそつ、小一郎は呻くと、抱えた男の体を庭の下へ投げ捨て、自らも飛び降り、即座に銃を構え「死にたくないやつは退けいっ」と叫んだ。勢いに気圧されて松明がさつと退いた。その様子を見るやくるりと身を翻し、縁の下へ逃げ込んだ。暗闇のなかで銃に弾を込めながら、退路を探して駆けた。

また時は遡り、伊予乃介のほうである。銃声が轟くと同時に、千鶴が飛び起きてきた。

「案ずるな、心配は要らぬ。おじさんが守ってやるゆえ」雨戸を少し開け外の様子を窺った。小一郎のいる離れを松明が取り囲んでいる。「小一郎殿、切り抜けられいよ」そう呟やくと、千鶴を抱き上げ静かに庭の暗がり而降り立った。この様子からすると、狙いは千鶴ではない、すれば敵は奇兵である。小一郎の身が案じられたが、まずは千鶴を安全な場所へ逃さねばならぬ。

ところが意外と容易く、屋敷の外へ出ることができた。しかも、「お武家様、こちらでございます」暗がりから声が聞こえた。闇を透かしてみれば小作人の大男、作蔵である。「この馬でお逃げください。ご家来様は残念ですが助かりますまい。さあ、早く」と言つて馬を差し出した。

「なぜ助ける？」伊予乃介が問うと、

「お武家様は悪い人じゃあない。わしには分かります」と答えた。

「主人に罰を受けよう？」

「ばれなきやあ平気でさあ」

「ならば今ひとつ頼みがある。この子をしばし見ておいてくれ。奴を助けに戻るゆえ」

「いや、それは困ります。そうしている間に見つかったら・・・」

つむじ風の如く黒い人影が、屋敷の裏門から飛び出してきた。小一郎だ。追つ手の松明をそろそろ引き連れ。

「作蔵おっ！なにをしておるっ！」と庄屋が叫ぶ声が響き、同時に疾風のごとく、小一郎が合流した。「この馬はなんだ？」作蔵は問いに答えるところではない。

「あちやあ・・・ばれた」蒼くなった作蔵に、「そなたも付いて参れ」と声をかけ、伊予乃介は千鶴を抱いて馬に跨り駆け出した。後を小一郎、作蔵が追う。程なく追つ手の姿は闇に消えた。

駆けながら小一郎は、馬はぬしが用意したのか？と作蔵に聞いた。「へい、そうでございます」

「なぜだ？ なぜ、われらを助ける？」

「へい、お二人とも悪い人には見えなかったので。皆は幕兵に違いないから討て、上吾野の意趣返しだと言っておったのですが・・・。それよりも、良くぞご無事で切り抜けられたことで」作蔵はつきり小一郎は助からぬと思い込んでいたようだ。

「襲ってきたのは何者だ？奇兵隊本隊ではないな？」

「へい、領隣隊と申す一隊でして、主にはこの辺りの若い衆が多くおります」

「ならば気の毒なことをした。幾人かの命を殺めた」

「・・・仕方のないことで」

「それに牙を残してきた。俺が奇兵であることがばれただろう」

「へっ、ご家来様は水戸藩士ではございませんで？」

夜が明け始めていた。萩はもうすぐそこである。

4・噂

鮎沢伊予乃介と名のる水戸藩士と、その家来の噂はひそかに諸隊の間を駆け巡った。鬼神のごとき銃と牙の使い手、二本の奇兵刀のみで大刀と渡り合う。碁盤ヶ岳から降りてきた。天狗の化身ではないか？と言う。噂はとうとう、真の奇兵隊、つまり高杉を中心とする奇兵隊本隊の幹部の耳にも届くところとなった。山県狂介である。

彼は面白がった。幕兵になりすまし、何事か事を成さんと謀るものあり。どうするつもりか？ 成り行きを見守るか。傍らにいた赤根武人に聞いた。「確か赤根殿が銃を二丁与えたやつが居ったな。」赤根は記憶を辿りながら「ええ、確か、前は花火職人だか鍛冶屋だかで、それまでさわった事もないくせにめっぽう銃の腕の良いのが居りました。名は小太郎だったか、弥太郎だったか」「うむ、そやつかもしれん」それにしても、と彼は思った。どうにも何か引つかかるものがあつた。それは噂の主ではなく同行者の方である。水戸藩士で、鮎沢伊予乃介という名。どこかで聞いた覚えがある。しかしどうしても思い出すことはできなかった。

萩城下

5・萩城下

至る所に戦禍の後が見て取れる。萩市街地である。立派な武家屋敷のたぐいは荒らされはて住む人もなく主は又家族はいずこへ逃れたのか知る由もない。民家の戸は閉ざされ、通りは人少なく、幕兵が闊歩し、いくつかの商店がまだ商いを続けているが、物価は驚くほど高い。幕府に寝返った賄賂商人に違いないと小一郎が憤る。軒を連ねた商家のなかに、まるで打壊しにあつたかのような茶店があり、一行の足は自然止まった。暖簾は裂かれ、入り口は壊され、腰掛や器が散乱している。

直感的に、小一郎はここへ住もうと決めた。伊予乃介は萩城へ行くだろう、約束ではここで袂を別たねばならぬ、小一郎は一人ではなく、作蔵となにより千鶴が居る。自分が情勢を探る間、この空き家に幾日か身を潜めて彼女等の安全を図るのが良いだろう。小一郎は店の中に足を踏み入れた。

無人と思っていた店の奥から、かすかに人のもみ合う音が聞こえた。むっ、と聞き耳を立てる小一郎。空耳ではなかった。あがらう女の声がもれ聞こえた。

小一郎は土足のままダンダンと踏み込んだ。伊予乃介も作蔵に千鶴を任せると後に続いた。奥の襖がガラツと開いて、ならず者の手を逃れた娘が飛び出してきた。小一郎は娘を背後にかばい、賊に向かつて銃を抜いた。幕兵であつた。

「小一郎っ、撃つてはならぬ」伊予乃介はそう叫ぶと、するりと前へ躍り出て、瞬く間に見事な剣捌きで四人いた賊を打ち倒した。だが血は一滴も流れていない。拳打ちだった。

「すごい腕前だな」小一郎が感心して言う。

作蔵を呼び、気絶している幕兵を通りに放り出させた。

二階から、幼い子供の母親を呼び泣く声が聞こえてきた。助けた

町娘が礼もそこそこに階段を駆け上る。やがて、一歳くらいの男の子を抱き降りてきた。そしてあらためて、危ないところを助けて頂きありがとうございました、と言う。よくよく見れば二十歳そこそこの美しい町娘である。結い上げた髪は乱れ、着物の着付けも崩れているが、花のように明るい瞳と眉、桜色の唇はまだ乙女のようにあつた。

事情を聞いてまた、なんと気丈で健気な娘かと心をうたれた。

彼女の夫は、町兵隊の嫌疑をかけられ幕兵に連れて行かれたらしい。夫の母親がいたが、その際の騒動で転び打ち所が悪く他界した。悲しみにくれる暇もなく、一歳の我が子を守るため働かねばならぬ。たった一人で茶店を再開したが、まるで面白がっているかのように兵隊がやって来てその都度店を打壊していく。そして今日のような狼藉に至つたそうである。大きな声で悲鳴を上げれば、二階で寝ている子が目を覚まし我が子にまで難が及ぶ、そう思いひたすら声を押し殺しあがらい手を逃れた所を、二人に助けられたのだ。話の最後に娘はこう言った。夫は必ず帰ってきます。それまでなんとしても私一人でこの店とこの子を守らないと。しかし、それが空しい願いであることを、彼女自身も分かっているはずだ。この小柄で華奢な体のどこにそんな強さを秘めているのか、この娘を助けたいと小一郎は強く願つた。それはどうやら伊予乃介も同じ思ひだつたようである。

「実は我らは萩に到着したばかりで、宿がない。しかもこの通り幼子もいる、大所帯だ。しばらく居候させてもらえと助かるのだが」と切り出した。助けて頂いたお礼にお部屋を貸すことくらい造作ないことです、悲しいことに皆様に食べて頂く米粒ひとつありません。恥じ入りながら言う娘を遮り、「なに、米は私が持つて帰る。貴女は何もせずとも良い」と伊予乃介は言った。娘は、

「困ります。そこまでして頂く訳には参りません。」と言う。ならば、と伊予乃介。

「店を手伝わせてもらおう。茶店を元通りに修理して商いをまた始

めよう。たとえ幕兵が嫌がらせに來ても私と小一郎が居る。私が登城して留守のときは作蔵がいる。貴女は思う存分働くが良い。そして我らは当然の事ながら宿賃を払う。それでどうじゃ？」

こうして一行はこの茶店に逗留することとなった。娘の名は香枝と聞いた。

茶屋

まずは壊れた戸の修繕から始めた。作蔵は、大工仕事は慣れている。小一郎ももとが職人だっただけに覚えも早いし仕事も綺麗である。まったく不慣れなのが伊予乃介であった。作蔵も小一郎も初め辛抱して手伝わせていたが、とうとう痺れを切らした小一郎に追い払われた。それでも何か手伝いたそうに離れずうろろしている。香枝の淹れてくれた茶を所在なさに飲みながら、何か手伝うことがあればいつでも申し出よとしきりに言っているが、小一郎も作蔵も手を出させない。

特筆すべきは、千鶴の変化である。香枝の子をあやしている。これまでまったく無表情だったその顔に笑顔がある。勿論、彼女の受けた心の傷は容易に消えるものではないのだが、現実の世界に向けてなにがしかの興味が湧いてきているのは確かであり、良い兆候には違いない。その対象が、自分より弱い存在の幼子であったのだろう。ひよつとすると、多津が身を挺して千鶴を守ったように、自分もこの子を守ろうと、その幼い心で考えているのかもしれない。多津の行為を少しでも真似することで、多津への想いを昇華させようとしているのかも知れない。無意識の内に。何にせよ、守る者ができる時、人は心の傷を乗り越えて強くなる。たとえ、傷が消えないにしても。

さて、日の暮れる頃には、すっかり店は片付き雨戸を閉めることができた。香枝が近所から米を借り受けてきて、質素だが暖かい夕食となった。近所の人達は、これまで香枝に同情していたが助けたくとも助けることが出来なかった。米を借りに来た彼女に、自分達も困窮しているにもかかわらず、米は勿論野菜やあり合わせの物を快く分けてくれた。さあ食べようという時に、ドンドンと表の戸を叩く音がして、なにやら騒々しい怒鳴り声など聞こえてきた。出ようとする香枝を制し、伊予乃介が戸を開けた。なるほど、先程の幕

兵が仲間を引き連れて仕返しに来たようだ。伊予乃介は彼らの上官らしき者に話した。

「私は水戸藩士鮎沢伊予乃介と申す。隊を逸れる前は水戸従軍組の大將を務めていた。ようやく萩へたどり着いたところだ。確かに昼間、ここの商家の娘に狼藉をはたらこうとしたならず者を退治したが、それが何か？異論あるならば、明日登城する故そこで聞こう」
そう言われて、幕兵達はスゴスゴと引き返して行った。

さて、食事も終わり、男連中は二階に寝ることとした。一階の奥の部屋に香枝とその子、そして千津が寝ることとなった。ただし、いつ不逞の輩が押し入るとも限らぬゆえ、交代で男が一人店の入り口の部屋に寝起きするとした。今宵は申し出て小一郎が番となった。「では、小一郎後は頼むぞ」と言い二階へ向かう伊予乃介は悪戯っぽい笑みを浮かべこう付け加えた。

「明日は登城するゆえ、そなたも仕度しておけ」と言った。

「ちよつと待て、何故じゃ」

「何故も糞もあるものか、そなたは私の家来であろう？」と、言い残して階段を登って行った。

面食らったのは小一郎である。俺も一緒に行って良いのか？約束が違うではないか？否、それを望んだのは俺であつたが、では、奴は長州のために働くとは心定めたのか？

あれこれ考え小一郎が混乱していると、スツと襖が開いて香枝が入ってきた。子供等はまだ寝付いたと言う。小一郎は考えるのをやめた。

「危ないところを助けて頂いたうえ、これからなにやら色々お世話になりそうで・・・、なんとお礼を言つてよいものやら」

「なんの、我らの方こそ、困窮しておる所へ大人数で押しかけ、申し訳ないのはこちらである。とにかく貴女には迷惑をかけぬ故、何も心配召されるな」

居住まいを正して言う小一郎に、

「小一郎様は長州の方ですね」急に無邪気な口調で香枝が聞いた。

不意打ちを食らって小一郎は大慌てに慌てた。

「な、何故そう思われるか知らぬが、根も葉もない推測じゃ。私は水戸の生まれで」弁明する彼をさえぎり、香枝は悪戯っぽい笑みを浮かべて言った。

「お国訛りが違います。無理してしゃべってますけど、小一郎様は長州の、それも下関の方でしょう」

答えに窮して黙した小一郎に、彼女はここぞとばかり畳み掛けるように聞いた。

「伊予乃介様は本当の水戸の方。どうやってご家来になり、そして幕兵の振りをしているのには何故ですか？」

急に好奇心旺盛になった若い娘の前に、小一郎は困り果てていた。まさか、すべて話すわけにはいかない。だが、話さずとも頭の良いこの娘は、解ってしまったようだ。

「まさか小一郎様は奇兵なのですか？」真をつかれて小一郎は肯定も否定もできなかった。それがすべてを物語っていた。そしてその意味するところも、目的も。さっきまでの無邪気さはどこへやら、香枝は懇願するように言った。

「危のうございます。どうかお止めください。それに伊予乃介様は承知の上で一緒にいらっしゃるのですか」もはや誤魔化すことは出来そうにない。

「・・・伊予乃介は見ての通り長州びいきじゃ。勿論、はなから俺が奇兵と知っておる。だが、俺は奇兵ではあるが、本隊とは逸れ今は連絡の取りようもない。俺は俺に出来るやり方で、長州の民を少しでも救えればと思っておる」

「香枝もお手伝いさせてください」有無を言わさぬ口調で言う。小一郎は一蹴にふす。

「気持ちはいれしいが足手まといじゃ。そなたはそなたの出来ることがあるであろう？ そなたの出来ることで民の為に何かの役にたてばよい」それに、と、小一郎は身を起こし、悪戯っぽい笑みを浮かべた。少し脅かしてやるつもりになった。この問答が少々面倒臭

くもあつた。「そなたは少し知りすぎたようじゃ。口を塞がねばならぬ」そう言つと香枝に体を寄せていった。「なつ、何をなさるのですか!」「決まつておる。今申したのであらう。口を、ふさぐのじや」そう言つや彼女の体を捉え、笑いながらくちづけようとした。勿論ふりである。が、

香枝は、きやつ、と短い悲鳴を上げると自分の部屋へ逃げ込みピシヤツと襖を閉めてしまった。形勢逆転じゃと、小一郎は笑いながら、香枝どの、今の話他言無用ぞ。と襖越しに言つた。

横になつたものの、なかなか寝付けなかつた。腕の中にまだ香枝の温もりがあつた。両の手に華奢な肩の感触が残つていた。だが嫌われただらう。

知る由もなかつたが、襖ひとつ隔てた向こうで香枝もまた、眠れずにいた。

登城

6・登城

翌朝、異変に気付いてないのは伊予乃介と一歳児の香枝の子だけだった。香枝の機嫌が著しく悪い。と言うよりも、他の者には優しく接しても小一郎にだけはつつけんどんと言うか無愛想と言うか、露骨に怒りを表現していた。これはかなり嫌われたようじゃと、小一郎は肩身の狭い思いで粥を食うた。伊予乃介はこういう事にはこの上なく鈍い。千鶴でさえも小一郎と香枝の様子を不思議そうに窺っているというのに、まったく無頓着である。これは旨い粥である。もう一杯所望したい。と言う。香枝は褒めてもらった礼を言いことさら優しげに粥をよそう。小一郎も茶碗を出しかけたがキツと睨まれ、恐ろしくて引つ込めた。

そこへ来客があつた。礼儀正しき若武者が、こちらに鮎沢殿がいらっしゃると聞き参りました。私は水戸藩士茅根幸吉と申す。本当に鮎沢殿がご存命でいらっしゃるのですか？と聞いた。声を聞きつけ伊予乃介が顔を出すと、鮎沢様っ！生きておいでは！と涙を流して喜び後は声にならない。まあまあ、上がるが良いと招きいれ再会を喜び合う。伊予乃介はこれまでの事を、親切な山の老人に助けられたと説明し、小一郎のことは国元から呼び寄せた家来である、と説明した。老人はともかく俺の事は苦しい方便だなと小一郎は思ったが、相手は微塵も疑う様子はない。と言うよりも、なにやら違う意味に解釈したらしく意味ありげな視線を小一郎に向け、ではこの方も我らの？と、小声で伊予乃介に問うた。伊予乃介はそれについては言葉を濁し、話を違う方へ持っていた。豊永志功について聞いた。いわく、今や飛ぶ鳥を落とす程の勢いの出世頭であるとの事。出陣すれば必ず奇兵の村を突き止め殲滅する。これまでに八つの村を殲滅したと言う。それを聞き伊予乃介も小一郎も憤怒したが、敢えて今声を荒げて議論することは避け、ともあれ登城する

こととした。

さて、仕度もすみ出立である。なにやら表が賑やかな。見れば三十人以上の水戸藩士が出迎えに来ている。伊予乃介が顔を出すと一斉に礼をした。

伊予乃介は至極当然のように先頭に立って歩き出す。小一郎は面喰らって列の最後尾に付いて行こうとした。すると伊予乃介が寄つて来て小声で言う。

「そなたは、私の護衛のふりをして傍を離れぬが良い」そしてたまたもや悪戯っぽい笑みを浮かべこう付け加えた。「彼らは、そなたを水戸藩隠密と思うておる」隠密とはつまり忍びの者である。

「なっ、どういう意味じゃ？それは困るぞ。いや、そんなものすぐにボ口が出るに決まっておる。何故そう思われねばならぬ？」

「案ずるな。そなたはただ黙っておればよい。そうすれば彼らの方から色々情報を持ってきてくれる。好都合であらう。それにそなたは隠密顔負けの牙の使い手ではないか」

そうは言われても小一郎が混乱するのは当然である。ただでさえ敵の牙城に入り込もうという時に、否、ならばかえって都合が良いのか？しかし、伊予乃介、かなり身分の高い侍であると思うていたが、自藩隠密を自在に使えるとなると一体どれほどの位にあるのか？色々考えすぎて、小一郎は訳が分からなくなった。こういう場合常に彼は腹を決める。考えない、それ以上の解決策はない。

萩城へ着いた。

見たこともなき男

7・見たこともなき男

小一郎は水戸藩士等と共に溜まり部屋と呼ばれる家来衆の控える部屋へ通された。伊予乃介は奥へと入って行った。

さて、どうなることやら。小一郎は取敢えず黙って様子をみた。言われてみれば確かに家来衆の自分を見る目が違う。畏敬の念が見て取れる。ほども無く、今朝訪れた茅根幸吉という若者が皆を代表するように寄って来て、こう言った。

「単刀直入に申しましょう。何がお知りになりたいか仰ってください。すれば、知りえる限りのことをお答えしましょう」

「ではまず、現在の戦況について教えて頂きたい」こうして始まり、三十人からの水戸藩士が口々に申し立て、一刻もたつ頃には必要充分な情報を聞くことが出来た。

要約するところである。

萩城陥落以来、主に市中の攘夷派藩士を捕らえ、また町兵隊と目される人間を捕縛し、更に夜毎攻め込んでくる奇兵隊と戦鬪を繰り返してきた。奇兵隊は部隊を三角山か田床山に構え、萩本陣の裏山に潜み、散発的な攻撃を繰り返していた。つい先日その萩本陣の裏山を焼き払った。潜んでいた奇兵の大半は逃がしてしまったが、それ以来夜襲は無くなった。続いて彼ら水戸藩士の処遇について話が及んだ。

桜田門の難以来、井伊大老の水戸嫌いは激しく彼ら水戸藩士は非常に冷遇されているらしい。現在三角山の山中に潜伏する奇兵隊を駆逐する作戦を遂行中であるが、これが非常に難を極める。山中の道なき道を探索しつつ進軍していると、何処からともなく牙が飛んで来て犠牲者が出る。一斉にライフルを乱射するが既に敵の影も形もない。または進軍中気がつくと一人あるいは二人いなくなっている。あわてて引き返してみれば、奇兵刀で喉を掻ききられた死体がある。

転がっている。山中にトンネルを見つけ入って行つた一隊が戻つて来なかつた。話を挙げれば限がない。姿のない敵と戦っている如きものである。そして水戸藩士にはその様な任務ばかり廻つて来るそうだ。故に六十人いた水戸従軍組は今では三十人しかない。対して、今一番の出世頭豊永志功の任務は奇兵隊の村あるいは奇兵隊に与している村を探索し殲滅する事。今朝の話と重複するが既に八つの村が彼の配下の者によつて皆殺しにされている。その戦果はめざましく、大老も彼には非常に目をかけている。だが彼等水戸藩士は豊永志功という人間に疑念を抱いている。なぜなら彼の殲滅した村が奇兵の村であつたと言う証拠が何ひとつない事。すべて彼自身の証言に過ぎない事。また、その事自体でその人物を計ることは出来ないが、彼が商人達に賄賂を要求する事。しかもそれがあまりに目に余る事。

小一郎はさらに詳しく聞いて、豊永の今後の任務予定及び捜査地域、果ては商人が賄賂を持つてくる日取りまで知ることが出来た。

一方、伊予乃介は城中奥深くまで入つて行き、訴えたき旨之有りと、大老に面会を求めた。待たされて通された部屋にいたのは井伊直弼ではなく下っ端の役人であつた。憤慨し抗議する伊予乃介に伊藤と名乗る小役人はこう言つた。

「大老の水戸嫌いは知つておろう？本気でお目通りできると思つていたのか？鮎沢殿と申されたか、桜田門で水戸藩士が大老に何をなされたか、考えてみればご自身がいかに無理を申しておるかお分かりになるう」

それはつまり失敗に終わつた井伊直弼暗殺計画のことである。

「されば貴殿に申し上げる。ぜひともこの事大老にお伝え願いたい」と前置きし、上野村での虐殺の様子を語つた。そこでは身重のおなごや年端も行かぬ娘が殺されていた事。しかもその身がことごとく蹂躪されていた事。交戦の形跡は見取れず、そこが奇兵の村であつたか疑問である事。

「もし、あの村が奇兵の村でなかつたのであれば、否、私はそう信

じておりますが、それであれば豊永志功と申される御仁は士分を剥奪されて然るべきただの虐殺者に過ぎず、その罪許されるものではないとお伝え頂きたい」と言った。それに対し小役人はいかにも小役人らしく事なかれの主義を押し通す。

「これこれ、滅多なことを申されるでない。豊永殿の人物は、非常に頭の切れる、決断力に優れた方であり、けつしてその様に非難されるものではない。一体何を証拠にその様なことを申されるのか」

「証拠？ 証拠が要ると申されるのか？ 私がこの目で見て来た、それは証拠にはならぬと申されるのか？」

「勿論であろう？ そなたの申されることは全て状況証拠に過ぎず、またそなたのみの意見でしかないではないか？ あのように目覚しい手柄を立てられている方を中傷していると思えぬ。それとも何か物的な証拠、あるいは証人でも居られるか？」

伊予乃介はよほど、こちらには生き証人ありと言つてやりたかった。千鶴のことである。だが、その名を出せば豊永の手の者によつて彼女の命が脅かされるのは必定である。また、心に傷を負い、いまだ言葉を発することさえ出来ぬ幼い子を、白砂の場に連れ出し証言を強いるのは酷すぎる。

「されば、豊永殿にお会いしたい。会つて実際に話を聞いてみたき故」

「豊永殿はお忙しい身である。あきらめた方が良かるう」そこへ、「声高に私の名をあげ何を話しておられるのか、失礼でなければお聞きしたい」そう言つて男が一人入つて来た。今の言葉から推測すればこの男が豊永志功に違いないが、伊予乃介が思い描いていた悪辣漢とあまりにもイメージがかけ離れていて、にわかには信じがたかった。

小柄ではないが背が高いわけでもない。ひよろひよろとした悪く言えばひょうろくだまみたいな男である。しかも斜視である。視点が定まらず何処をみているか分からない。口元には絶えず人を小馬鹿にしたような薄ら笑いを浮かべている。

これはこれは豊永殿、この御仁は水戸藩士であるが、貴殿の功績に難癖申しており、私が諫めておった所です。小役人はそう言った。水戸藩士と聞いて豊永はふんと鼻で笑い、いよいよ人を馬鹿にした態度をとった。

「水戸藩士が何用じゃ？」胡坐をかいて座りこちらを見るが、その目線が自分を見ているのかそれとも自分の後ろの襖を見ているのか、伊予乃介は判断しかね思わず後ろを振り返って見た。その様子に、豊永志功気を悪くしたようである。

「申したいことがあるのであろう？遠慮せず申せばどうじゃ」

「ならば問う。上吾野村で貴殿の部下が行った虐殺を目の当たりにしてきた。ご自身は庄屋屋敷に留まって居られたそうだが、その理由は如何？また、当然事後に検分を為されたと存じるが、交戦の形跡は見て取れたのか」

「まず、私の部隊は三手に別れて搜索を行った。指揮官たる者一番連絡の受けやすい場所に陣を構えるのが当然のこと」

「まあ、酒抜きですな」伊予乃介の皮肉に動ぜず、

「当然である。検分については十分な調査を行っており、私の見解ではあそこは奇兵の村に間違いなかったと信じておる」と言った。

伊予乃介も負けず

「私の見たところ殺されていたのは非戦闘員ばかりで、交戦の跡は見て取れなかったが？」

豊永と言う男、ものの言い方が非常に憎々しげである。頭から人を馬鹿にしている様子がありありと分かる。

「それは貴殿の観察力が足りぬのであろう」

「なるほど、拙者の目が悪かったと？ところで奇兵の村と言うのはゲーベル銃ひとつ持たぬものであるか？見たところ銃撃戦の形跡は無かったが」

「水戸の方は何も知らぬと見える。農兵隊であればそういった物の配備が遅れた村もある。また鍛錬も充分ではないであろう。外国艦隊の襲来及び此度の長州攻めで奇兵どもの装備は末端まで充分に揃

つてはいないのじゃ」それに、と付け加えて

「お主はどうも、おなごともが殺されていたことに執着しておるようじゃが、何か考え違いをしておらぬか？ 敵のおなごをどうしようと思われぬものではなからうか？」

伊予乃介はもはやこれまでと、席を立つこととした。それまではこの豊永と言う人間を必死で計ろうとしていた。人間にはいろんな者がいる。今日の前にいる小役人然りである。逆に、小一郎など身分は違えど、ものの感じ方考え方が己と双子であるかのように思うこともある。深手を負い倒れていたのが自分ではなくこの豊永であれば小一郎は助けたであろうか？ 晴蔵は？ 小一郎の言葉が頭の中で蘇る。「そうでなければ途中で殺したか、殺さぬまでも打ち捨てて去ったわ」豊永の最後の言葉に結論は出た。奴は我らとは相容れぬ、どこにかまったく正反対の人間である。おそらく弱い者には徹底的に強く、権力には徹底的に媚びるたちであろう。自身の損得のみで動き、自身の利益のためにはいかな姑息な手段も平気で用いる卑劣漢と考えてよいようである。奸佞。答えは出た。

「失礼する」伊予乃介、席を立つた。

答えは出た。もはや己が剣により民を救うより他にすべはない。

おはぎ

天狗

1・おはぎ

茶店に戻ると、香枝が上機嫌で迎えてくれた。

「聞いてください。おはぎを作ったの。それが大当たりで」

確かに店先に「長州はぎ 三十七文」と大きな看板が出ている。

長州はぎとは一体どんなものであるか、小一郎と伊予乃介は不思議に思い説明を求めた。香枝の答えはこうである。長州はぎと言っても別に何の変わりもないごく普通のおはぎである。それを皿に三つ並べて売る。三十七文という値段は、はぎにしてはちと高い。客は当然値切ってくる。まけてくれと。そこで香枝は瞳にめいっっぱいの思いを込めてこう答える「いいえ、はぎはまけません（萩は負けません）」「一瞬客はたじろぎ、そしてその意を理解し、微笑みまたは涙ぐみ「そうじゃ、まけてはならん」と言い買う。思えば、家を捨て避難民となり萩を離れる者のなんと多いことか。そんな時であればこそ、この様な若い娘のほんの小さな心根に胸を打たれるのであろう。当然幕兵も客に来るが意味は通じない。はぎにしては高いのう、と言つくらいである。三つ並べた様は毛利家家紋を、三十七文という値段は、毛利家所領の三十七万石を暗に意味しているのだ。「これは良い思いつきじゃ」伊予乃介が褒めると、香枝は真っ赤になつて照れると「・・・さんのお陰です」聞き取れぬ小声で言つた。「私には私のできることがあると・・・さあ、ご飯にしましょう。もう仕度出来ていますよ」と言つて奥へ入った。

その夜遅くまで、明日の店の仕込みを手伝った。鮎沢家には、男子厨房に入らずの家訓は無い様である。平気で手伝おうと申し出た。香枝があわてて押しとどめたが、伊予乃介も小一郎もかまわず手伝う。何しろ香枝は子供の世話から店のきりもり、果ては皆の食事の支度に洗濯まで、朝から晩まで独楽鼠のように働いているのだ。手

伝わぬ方が男ではない。だが程なく、伊予乃介にはこちらの才も無いことが判明し、小一郎により追ひ払われた。隅の椅子に腰掛け、真面目な顔して、何か手伝うことがあればいつでも申し出よ。と、繰り返す。さて、小豆を煮終わる頃、伊予乃介は作蔵を呼びこう言った。

「私と小一郎は、明朝早くに出立する。おそろく一日戻って来れぬであろう。留守の間しっかり頼む」作蔵は任せておいてくださいと請合った。

小一郎のつかんだ情報に因ると、明日豊永志功の一隊が絵堂の方へ出陣する。これまでの奴のやり口から行くとまず大きな村は襲わない。必ず山間部の小村を襲っている。そこから判断して既にめぼしは付けてある。

斑の狗

2・問われて答えるに

秋吉台にほど近い、絵堂の集落からさらに山中を分け入ったところにある小村であつた。

幕兵がやって来て、奇兵検めである。と言ひ村の衆を集めた。人々は疑問に思いながらも従う。人々が集まると、やおら兵隊達は刀を抜き、次々と人を斬つていった。悲鳴があがる。女達が逃げだそうとする。男達が抵抗する。だが、圧倒的に武力が違ふ。殺しかたは残虐だ。腹を引き裂き内臓をえぐり出す。首を切り落とし木の枝に挿す。赤子を地面に叩きつけようと、ふり回す。そのときだった。音もなく飛んできた牙が、今にも赤子を殺そうとしていた兵の後頭部を割つた。続いて四枚の牙が幕兵の背を、首を、額をえぐつた。何事か？ 兵隊達が色めきたつたところへ、猛々しい蹄の音とともに、木々をなぎ倒し、藪を突き破り、どうつと黒い影が山中から踊り出た。

二頭の馬。馬上には黒い鎖帷子に覆面の男が二人。一人が両手の拳銃を乱射する。幕兵が一斉に銃を構える。そこへ空馬が突入してきた。がため、狙い定まらずまた、混乱を助長する。馬が駆け抜けた跡の砂塵の中に人影があつた。その人影に向けて銃を構えた時には、既に砂塵から飛び出した人影に三人が斬り伏せられていた。幕兵の中央に抜刀した覆面の男。一同、一斉に襲い掛かるが、その無数の白刃の下を掻い潜り、手にした業物の大刀を、一太刀舞うが如く、二太刀竜巻の如くふるうたび一人また一人と討ち倒し、その屍のうえを乗り越えて、さらに容赦なく突き殺してゆく。

銃を持った兵等は二挺拳銃の男を狙つた。銃弾が馬上の男を掠めてゆく。瞬間男の姿がかき消えた。と、鞍に足を引っ掛け、馬の腹の下から顔を覗かせ両手を突き出し、たて続けに引き金をひく。トンと片手について馬から降りると、すつくと立った二挺拳銃の男。

兵ただなかに仁王立ち、狙い違わず敵撃ち殺す。

兵等が気付いた時には、既にライフルを持った味方はあらかた倒されていた。が、男の弾も切れたようである。今だ。と、左右同時に襲いかかるが、三日月型の牙がその兵の額を割る。さらに、大刀をさらりとかわし敵懷に飛び込むや、奇兵刀で喉を掻ききる。

二挺拳銃の男は思った。この隊で一番の手練れはどいつだ。指揮官不在、であればこの隊の精神的支柱は一番腕の立つ男、自然その男に頼った闘いかたをする。いた。いま一人の男を取り囲んだ兵の中に。背後から襲いかかるうとしている。こいつだ。いかにも浪人くずれのような男。その敵兵に牙を飛ばす。兵はふりかえるや否や、背後から飛んできた牙をその剣で弾き落とす。二挺拳銃の男は瞬時に間合いを詰めた。袈裟懸けにふりおろされた敵の剣を、体をひねり半身にしてかわす。右足で大地を蹴って敵懷に躍りこみ、奇兵刀を敵首横に深々と突きたてた。動脈を切断された敵の血飛沫が舞い散る。

思った通り敵は浮き足立った。逃がさじ、とばかり覆面の男が、今や戦意喪失した幕兵を斬り伏せてゆく。最後の一人が身を翻して逃げ出そうとした時、牙使いの男の投げた奇兵刀が深々と後頭部に突き刺さり、わずか数分間の戦闘が終わった。

馬上の人となり立ち去ろうとする男二人に、人々は駆け寄りひれ伏し拝み倒した。天狗様！天狗様じゃ！口々に言う。村の長らしき者が、噂に聞く天狗様でございましょう？どうかお名乗り下さいまし。と言う。

歳若い方の仮面の男が、しばし考えこう答え立ち去った。

「……我らは、斑の天狗」

3・斑の狗

伊予乃介、小一郎が帰宅するより早く、噂は駆け巡っていた。覆面黒装束で斑の天狗と名乗る二人組が、あろう事かたった二人で三十人からの幕兵を倒し虐殺の危機にあった村を救ったという。人々

は辺りはばからぬ大声でその快拳を語りあう。

香枝の茶店も大賑わいである。噂も手伝って皆はぎを買い求める。いまや約束事のように客は「まけてくれ」と言う。香枝が嬉々として「いいえ、はぎは負けません」と言うと言客は喜んで買って行く。店先も黒装束の二人組みの話で持ちきりだ。伊予乃介、小一郎は面映い思いで店に入り、「忙しそうだな、手伝おう」と香枝に声をかけた。

「いえ、大丈夫ですよ。奥でゆっくりされて下さい」と香枝は言った。が、二人が傍を通ったときふと顔を曇らせた。かすかに硝煙と血の匂いがした。しかし二人は香枝の表情の変化に気付かなかった。翌朝、瓦版が撒かれた。そこには権力にはばかったのか、「斑の天狗」ではなく、「斑の狗^{いぬ}」と書かれていた。要約するところである。斑の狗と名乗る覆面黒装束の二人組みが、奇兵搜索にあたっていた豊永志功殿配下の一隊を殲滅した。幕軍はこの者二人を三十両の懸賞首とし捜査を始めた。この二人について何か知りえる者は協力されたし。なお、一人は二兆拳銃で奇兵の使う人喰い牙と奇兵刀を使う。今一人は鬼神のごとき剣の使い手である。

二人は何食わぬ顔をして登城した。香枝が心配そうに見送った。

憂国の志士

4・憂国の志士

所変わって長崎である。ここに一人鬱屈とした思いを抱えた男がいた。男は薩摩藩が借りている貸家に彼の配下の者等と住んでいる。全国を放浪する浪士達が立ち寄る。皆、この男を慕ってである。自然男の耳にはありとあらゆる情報が入って来る。殆どが長州に関する話である。この状態が長引けば長州一藩の問題ではなく日本国の危機である。それよりも罪なき民衆の虐殺されるを聞いたびに心痛んだ。そのどれもが聞くに堪えない話ばかりである。

例えば、中津まで逃げ延びようと、夜陰に乗じて小倉藩に上陸する人々がいる。が、知つての通り関門海峡は潮の流れが速い。おのずと渡れる時間帯は限られている。小倉藩藩士は頃合を見計らつて見回り、上陸して来る長州難民を片っ端から切り殺している。または、隣国で、なおかつ攘夷藩である広島藩に逃げ込もうと大挙して人々がおしよせる。が、その国境には芸州口幕軍が布陣していて、おしよせる難民に一齐に、砲火を、銃撃をあびせる。そのなかを、何とか一人でも助けようと、幕命に叛き人々を安全な方向へ誘導する為、身を挺して飛び出す広島藩士がいる。が、彼等もまた銃火に倒れる。

最も酷い話は海上で起こっている。毛利候を慕い漁船に毛の生えた程度の船で朝鮮半島を目指す者が後を絶たぬ。が、彼らはことごとく虐殺される。否、簡単には殺してもらえない。これでもかという程幾度も幾度もいたぶられ、最後に命尽きて行く。そこに待ち受けているのが、正規の幕府の軍艦であればまだ良い。国抜けの罪で捕らえられるか、悪くてもその場で処刑されるからだ。それ以上の地獄がある。海賊である。その正体ははっきり分からだ。士分ではない、何者か。幕府から船と銃器を与えられているという説もある。彼らは繰り返し繰り返し襲撃する。奪える金品は全て奪い、女は子

供であろうが輪姦し、それは必ず拷問を伴い、逃げ場のない海の上で、人々の命尽きるまで執拗につきまとう。

船じゃ、船がいるきに。男は齒ぎしりしながら言う。船さえあれば……。それにしても奴は一体どれだけ待たせるつもりかいのお。今、その時であった。待ち人は来た。家の入り口に大きな体の男がのっそり入って来た。

「坂本さあ、待たせたのう。じゃが、やっと用意できもうした」

どたとたと二十人ばかりが飛び出してきた。どの顔も嬉々として輝いている。その人垣を分けるようにして、蓬髪長身の男が喜びに震える体を抑えこみ、普段の飄々とした態度を装い答えた。

「遅いきに、待ちくたびれたぞい」太った方の男は素直に詫びた。

「申し訳なかこつ。じゃが、この船は坂本さあの自由に使ってもらつてよか。薩摩藩の貸与ではなく、この船、薩摩藩は紛失したことになるて居り申す。じゃから、何に使おうと坂本さあの自由じゃ。

蒸気船が三艘ある」

歓声が上がった。これで存分に暴れまわれる。幕軍どもめ、目にものを見せてくれるわ。大声で騒ぐ隊員達をよそに、坂本と呼ばれた男は「最新鋭の蒸気船を三艘も紛失したことに出来るとは、やつぱり貴殿は大した方じゃ」と男を褒めちぎった。「いやいや、まだまだ自藩は動けぬ故、坂本さあに働いてもらわんこつには長州は救えん」

その夜、亀山社中と名乗っていた一隊は、海援隊と改名した。目的は海上からの長州支援である。男の名はいわずと知れた坂本龍馬。船を与えた男は西郷隆盛である。

下関

5・下関

今日は茶店を休み、小一郎、伊予乃介、作蔵と千鶴、それに香枝とその子良太、一家総出と言えばおかしいが、皆で下関へやって来た。目的は物資の調達と行楽である。根を詰めて働いている香枝と相変わらず言葉を発せぬ千鶴を少しでも楽しませてやろうというのがひとつ。今ひとつは、白石正一郎の回船問屋小倉屋へ出向き、そこで必要な物資を手に入れようといった所である。その後、もう一度奇襲に成功したが、もう鉄砲の弾が残り少ない。それに、奇蹟的に二度の成功を収めたが、ただ運が良かったに過ぎない。三十人からの幕兵にたった二人で挑んでいればいつかは死んでしまうだろう。白石がまだ小倉屋をかまえているのであれば、彼に情報を流すことで、奇兵隊に動いて貰ったほうが良い。あれから殆ど毎日のように登城し、情報入手に努め、幕軍の目的と戦略をほぼ掌握することができた。その情報を流す。

下関の街は米軍の支配化にあるとは言え、萩とは違って華やいだ雰囲気がある。歓楽街ゆえの活気がある。物珍しい物が沢山売っている。また米兵は幕兵に比べ比較的紳士である。町民に手出しすることなどない。勿論、遊郭などではちと様相が違うが。

千鶴に飴を買い与えてやった時の彼女の顔を、伊予乃介、小一郎は生涯忘れないだろう。山奥で育った彼女には無理もないことだが、飴など食べたことは勿論見たことすらない。始めて見る奇妙な食べ物に恐る恐る口にはこんだ時の表情、そしてその後のびっくりしたような顔と笑顔。愛らしいことこの上なかった。伊予乃介は香枝に見立ててもらって髪飾りを千鶴に与えた。とにかく、何でもいい。何か楽しい思いをさせたかった。

小一郎は皆と行動を別にし、小倉屋へ向かった。この状況下で奇兵隊御用商人の店がまだあるのか半信半疑だったが、昔と変わらぬ

まま営業を続けていた。不思議なものである。米兵の情報収集力が足りぬのか、何か思惑があつて手を出さぬのか、そこは知れぬが、小倉屋の白石正一郎と言えば知らぬ者のない高杉晋作のシンパで、初代奇兵隊の会計方を務めていたばかりか、結成当初の奇兵隊に宿舎を与えていた。その店がまだ営業しているのである。

小一郎はなかに入り、白石の姿を探した。見当たらぬので店の者に白石正一郎氏に会いたいと頼むと、兄はもう居りませぬが、言つて店の主が出てきた。小一郎は思わずにやりと笑つた。何が兄だ、本人ではないか。白石の方は小一郎の顔をもう忘れてしまつていているようである。トンと気付かぬ。どころか警戒している。

「白石殿、この顔見忘れたか？ 奇兵隊結成時にいの一番に入隊した花火師の小一郎だ。覚えておられぬか？」そう言つて、懷から牙と奇兵刀を取り出して見せた。

なんとつ！ 幕兵だとばかり思つて居つたが確かにその顔見覚えがある。確か銃の腕がめつぽう良かった御仁じゃな。そうか、そうか、良くぞ参られた。いずこから参られた？ なに、萩とな。ならば道中幕兵を装うのは良い考えじゃ。喋り続ける白石を遮り、小一郎は切り出した。

「牙と銃が欲しい。それに弾も。あと、できるだけ口径の太いライフルがあれば所望したい」

白石は心得たとばかり、小一郎を奥へ案内した。何の変哲もない廊下がくると回転し奥に小部屋があつた。壁一面の拳銃、ライフル、人食い牙が目を奪う。

牙にはいろんな種類がある。もとの目的は暗殺用の武器である。例えば敵の歩哨を音もなく倒す。あるいは森の中で待ち伏せし敵の斥候を倒す。ライフルを使えない状況、言い換えれば音をたてられない状況での使用を目的としている。始まりは斧であつた。前述のような状況下で斧を投げて敵を倒していたのだが、それが発展改良され人食い牙という武器が生まれた。故に例えばこの三方斧と呼ばれる牙は最も初期の頃のもので、その名の通り三方に斧があり

短い握りがある。投げれば回転しながら飛び、どの面が当たっても敵の骨まで砕く。最も殺傷力の高い牙である。小一郎のよく用いる三日月は、弧を描いて飛ぶ。熟練すれば森の中でも、立ち木を避け敵に命中させることが出来る。蝙蝠は三方斧を二方に変形させた物といえるが、斧と呼ぶには薄手である。三方斧ほど重量もなく、真直ぐ飛ぶので比較的扱いやすい。今ひとつ、最も奇妙な形をした牙がある。黄金虫と呼ばれている。穴が穿ってあつてそこを握りにして投げる。形は左右対称とは程遠く、片面に死に神の鎌を思わせる刃が牙をむいている。大きさは牙の中でも最も大きく通常背中に装備して使う。一番熟練を要するが、熟練すれば弧を描いて飛ばすことも、木立をなぎ倒して真直ぐ飛ばすことも出来る。小一郎は三日月と黄金虫を買い求めた。それから拳銃と弾とホルスター。そして彼の最後の所望品について白石は「これはおそらく使えぬ物だが・・・」と言いながら奥から二丁のバカ太いライフルを持ってきた。

「英国のミリングム卿の依頼で作ったものだが、とにかく太すぎて使い物にならない。口径は十四ミリある。撃つても的に当たることはないだろうがそれで良いのか？」

「かまわぬ。頂こう。ところで奇兵隊本隊は何処に在る？」唐突な質問に白石が口を濁すと、

「大体見当は付いておる。秋吉台周辺の洞窟じゃろう？」と続けた。秋吉台には大小四百近い洞窟があり、それらに潜伏していると小一郎は考えていた。白石が黙っているのです。

「幕府もおおよそ分かつているようだ。奇兵探索の手を秋吉台周辺に伸ばしている。だが秋吉台を攻撃することはしない。的となつてゐるのは周辺の民だ。幕府は絶対に認めることはないだろうが、奴らの作戦は民を根絶やしにすることだ。民を根絶やしにすることに拠つて、奇兵隊の兵糧を絶とうとしている。併せて隊と民の心を分断しようとしている。奇兵検めと呼び、村々を殲滅していつている。故に、それを恐れ、萩は勿論、その近郊、否、今では長州全土から民が村を捨て国外へ逃れようとしている。そうして避難民となつた

者達の運命は、今では皆の知るところじゃ。白石殿も存じておられるであろう。悲惨極まりない。その作戦を秘密裏に任され遂行している者の名は、豊永志功。奸物井伊直弼の腹心中の腹心。そ奴、人にして人に非ず、その行状、畜生にも劣る。奴の奇兵検めの日取りと探索地区をここに持つてきた。これを高杉殿に渡して欲しい。頼む。民を救ってくれ」

「分かり申した」白石は感嘆して答えた。「よくぞこれまでの情報を手に入れられたものじゃ。小一郎殿は命を賭して幕軍に潜伏しているとお見受けした。頂いたこの情報、必ずや本隊へ届け、その豊永志功とか申す者、倒していただこう」小一郎と白石はかたく手を握り、袂を別った。

忘れてはいけない。ここで、小一郎には奇兵隊に戻るという選択肢もあったのである。白石を通せばそれは容易いことだった。が、そうしなかった。それが彼の選択だった。

さて、その夜は下関に一泊し翌朝、小一郎はまた行動を別にし、今度は職人時代の馴染みの店をまわり、鉛や錫、真鍮それから簡単な炉を作るための耐火煉瓦や型取りのための石膏といったものを買求めた。途中、異人の一行とすれ違った。中の二人がいやに印象に残った。一人はばかに背が高く、髭を生やしていた。米国人らしいが周りの気の使いようを見ればかなり偉い人物のようである。いま一人は英国人のようだが、流暢な日本語を話し、周辺の長州人に話しかけ色々説明を求め、それを英語に直して、長身の男に解説しているようだった。同行しているいずこかの藩の役人がアーネストさんと呼んでいた。小一郎には知る由もなかったが、この男が後に幕末史について貴重な見聞録を残す英国通史アーネスト・サトウであった。

待ち合わせ場所で、小一郎は香枝達を見つけることができた。だが、見つけはしたがすぐには声を掛けられなかった。伊予乃介が香枝の子を抱いていて、間に千鶴を挟んで並び歩く様は、仲睦まじい夫婦のようである。その様子に少なからずショックを受け、更にシ

ヨックを受けたこと自体に動揺した。自分は知らぬ間に香枝を好いていたのか？無理も無いとも言える。香枝は美しい娘だ。特に、内に強いものを秘めた気丈な瞳が魅力的だ。そうかと思えば無邪気で無鉄砲でそんなところも小一郎は好いていた。だがそれがどうしたと言っただ？どうしようもないだろう。望んではいけないことだ。

香枝の方が小一郎を見つけ手を振った。

たった今起こった信じられない出来事を早く聞かせたくて堪らない様子だ。それはなんと、異国の人達が千鶴の写真をぜひ撮らせてくれと言ったこと、併せて自分達も写真を撮ってもらったこと、だそうである。

「どんなふうに写ったかしら？」

香枝は嬉しげに言う。魂を取られるなんて田舎者の言うことだわ、と言う。

だが、小一郎は香枝が期待していたほど驚きもせず、逆に訝しがる。

「なぜ、千鶴の写真を撮りたがったのだろうか？」小一郎が不思議がると、伊予乃介も分からぬが、と前置きし、

「その表情に戦さの悲劇を見て取ったのだろう。アーネストと名乗る英国人はキャンプを作ろうとしているらしい。本国の新聞に載せ寄付金を集めたいと語っておった」

「キャンプ？」

「長州人が長州を離れなくともすむように、安全に收容する施設のことらしい。千津の身の上も話して聞かせた。すると奥地の虐殺の現場に行きたがっていたが押し止めた。危険極まりない故。どうしても望むのであれば米兵の同行を助言した」

「キャンプ・・・？それが実現すればこの上ない事だが・・・」

アーネストは先程小一郎がすれ違った異人の一行である。言われてみればカメラを持った男もいた。

小一郎達には知る由も無かったが、アーネスト・サトウは長年日本に留まるにつれ幕府側の役人の事なかれ主義の二枚舌に辟易とし、

かえって戦果を交えた薩摩や長州の人々に好感を持っていた。そこへ持ってきてこの内乱であり、また庶民の虐殺されるを知るに及びひどく心を痛めており、何とか力になれないものかと考えていた。そこで難民キャンプ設立を画策し、米国からある人物を招き状況打破を策したのである。

本隊

救済の手

1．人消し

さて、茶店に戻ると小一郎はなにやら細工ごとに取り掛かった。まずは買ってきた例のバカ太いライフルの銃身を短く切った。それから鉛を溶かし型に流し込み、幾百という細かい鉛の玉を大量に作った。更に一番苦労した点だが、錫と真鍮を溶かしこれも型を用いて信管を作った。次に厚紙を巻き信管に筒状に取り付けると中に先程の鉛の小玉をたっぷり入れこんだ。最後に厚紙の先端をねじり、栓をして出来上がりである。彼が作ろうとしているものは花火のごとき銃である。つまり、発射されると放射状に弾が飛び散り、多少銃の心得がない者でも容易に的に当てる事ができる。偶然ではあるが小一郎の作ったものはソウド オフ型の散弾銃である。これを伊予乃介と、そして用心の為に作蔵に持たせるつもりだった。

翌早朝、伊予乃介と連れ立って完成した銃の試し撃ちに出かけた。人里はなれた山奥の密田で、藁の案山子を撃った。轟音と共に案山子は消し飛んでしまい、その威力に驚いた。小一郎でさえ予想していた以上だった。伊予乃介はその銃に「人消し」と名をつけた。

2．本隊

小一郎と伊予乃介は馬を走らせ、とある村へ向かっていた。白石に奇兵検めの予定を渡しはしたものの、奇兵隊本隊まで伝わるかどうか確信が持てなかったからだ。不安は的中した。

前方から、傷を負い幼子を抱いた瀕死の女が逃げて来るのが見えた。馬上の二人の姿を見てすぐるように言った。

「お助けくださいませ・・・村が・・・」小一郎は馬を止める暇ももどかしく、

「案ずるなっ！そなたの村はきつと救う！」そう叫びながら駆け抜

けた。

程なく比較的大きな集落が見え、遠目からも田畑の中を逃げまどう人々の姿が見てとれた。二人はまっしぐらに馬を走らせる。青々とした稲田の中を泥だらけになりながら逃げてきた少女とすれ違う少女は二人の姿を見てパツと顔を輝かす。背後から追ってきていた幕兵に、伊予乃介は人消しの銃口を向ける。ドンと鈍い音と共にその者の姿は吹き飛んだ。少女があつけにとられた。即座に弾を込めながら、「今の男、案山子よりも骨が無い」冗談めかして伊予乃介は言う。小一郎は既に両手に銃を握り締め手綱を取りながら、口にガツシともう一丁銃を咥え、廻らぬ舌で「いひよげ（急げ）」と答える。彼は肩バンド式のホルスターで腹に二丁更に背中にもう二丁の銃を装備している。つごう七丁の銃だ。やがて逃げまどう人々と虐殺の現場の中心部へ馬は突っ込んでいった。

伊予乃介は馬のわき腹にしがみつき幕兵の集団の中へ突っ込んだ。馬の足に幾人かが蹴り殺され、蜘蛛の子を散らすように幕兵たちがサツと退く。退いて輪になったその真ん中にスックと降り立つと、一番近くにいた者を人消しで吹き飛ばした。その威力に幕兵どもは度肝を抜かれた。口々に狗じゃ、鬼の銃じゃ、と騒然となる。さて、一発撃つと弾を込めねば使えない。伊予乃介は人消しを懐に納め、すらりと抜刀した。一瞬の間。隊の長らしき者が「者ども、怖気づくな！手柄をたてる時ぞ！」と叫ぶと、始め気圧されていた連中も敵が一人と見、一斉に襲いかかった。その刃の中を伊予乃介、舞うがとき剣さばきで次々と敵を切り伏せていく。雨と降る敵の刃を風の如くかわし水の如く受け流し、ここぞと見るや竜巻の如き豪の剣で敵を鎧ごと切り裂く。その強きことまさに鬼神である。

一方、小一郎は馬上から銃を四方八方に乱射し、こちらもまた狙い外さず敵の頭を次々と打ち抜き四丁の拳銃が空になる頃には二十人以上倒していた。が、敵のライフルが一斉に小一郎を狙い撃ちして、頬を腕を弾が掠めてゆく。ビシツと鈍い音が立て続けに響き、彼の乗った馬がドオと音を立てて倒れた。馬が撃たれたのだ。彼は

空になった銃をホルスターに収めると、口に咥えていた銃を乱射しながら物陰を探して駆けた。

銃火の中を幼い男の子が泣きながら逃げ場を失っている。小一郎はその子を軽く抱き上げ、雨の如く飛んでくる弾の中を駆け抜けた。土蔵の中に飛び込む。土壁が一斉射撃を浴びボロボロと崩れ落ちてゆく。子供に奥に隠れているように言い残すと、背中の二丁の拳銃を抜き再び銃火の中へ飛び出した。

駆けながら伊予乃介を探す。今回はどうにも分が悪そうだ。敵の数が多すぎる。腿を弾がかすめ小一郎はたまらず転ぶ。もんどりうって転びながらも即座に身を起こし、今撃った敵を振り返り討ちにする。二人倒す。三人、四人。もはや弾切れだ。弾を込める暇など無い。後は牙のみである。大きな農家の庭先で十人ほどの敵に追詰められている伊予乃介を見つけた。小一郎は牙を飛ばし敵の一角を切り崩し、伊予乃介と合流した。とは言え、二人揃って追詰められたに過ぎない。

「無事であったか？」伊予乃介が問う。しかしどうする？もはやこれまでか？小一郎が答える。

「あきらめるとは、らしくないぞ」

「だが、敵の数が多すぎる。いくら倒してもきりが無い。手に負えぬ」そうこう言っている間にも、じりじりと敵は間合いを詰めてくる。二人が覚悟を決めたその時である。村を取り囲むようにして姿を現したのはそろいの鉢がね、牙とライフルで武装した奇兵隊本隊であった。ドツと時の声があがり激しい戦闘が始まった。指揮を取る伊藤俊輔の姿も見える。土煙と喧騒の中、伊予乃介と小一郎は隙をみて姿を消した。

「もう大丈夫であろう」村を後にしながら小一郎は言う。

「本隊に連絡は入った。後は任せておけばよい」奇兵隊本隊に連絡は届いていたのだ。ただ到着が遅れていたただけだ。後は白石に定期的に情報を流せばよい。民は救える。

「そうであろう？他に我らにできることは何かあるか？」伊予乃

介が問う。

小一郎はしばし沈黙考したのち、こう言った。
「・・・ひとつある」

海上

3・海上

人々は重い腰をあげた。憔悴しきつたその体に鞭打つように。海賊船が近づいて来ているのだ。無駄な努力とは知りながら男達は手に手に棒切れを持ち、女達に船倉に隠れるよう促した。一人の若い娘が悲壮な声をあげ、海へ身を投じた。あの地獄をまたもやその身に加えられる位なら死んだ方がましだったのだらう。幾人かが海上を見やったが、既に娘の姿は何処にもなかった。水を吸った着物の重さに耐え、浮かんでいる力さえ残ってはいなかったのだ。

その船、行方無く、舵も無く帆も無くただ大海を潮流に翻弄され、さまようばかり。水も食料も無く否、奪われ、希望も生きる力さえ奪われて、あるのは絶望と疲労と混濁した意識のみ。

やがて海賊船が横付けされ、武装した男どもがバラバラと乗り込んできた。棒切れで抵抗する人々をゲーベル銃の台座で打ち倒し、船倉に隠れた女達を引きずり出す。海賊の体にしがみついて止めようとすると老人が幾度となく打ち据えられ、憔悴しきつた体には、それだけで致命傷になったようだ。ひとりの海賊が船倉の戸棚を開けた時、中から飛び出してきた少年に尖った木の棒で刺された。海賊は怒り狂い少年を撃った。戸棚の奥に少年が守ろうとしていた者、同じ歳の頃の少女がいた。怯え泣き叫ぶその子を、海賊は燦々と陽の照りつける甲板へ引きずり出した。絶命しきつていない少年が後を追いついて出てくる。やめてくれ、叫ぼうとするが血を吐いて声にならない。・・・天よ、かような残虐非道を幾度許されるつもりか！空を仰ぎ、薄れゆく意識で想う。我らに一体何の罪がある？弱きことが罪なのか？そなたは弱き者を助けてはくれぬのか？あの娘を助けぬと言うのか？それが意志なのか？

ドンッと大きな音が天から降ってきた、と、次の瞬間には耳を劈く様な大音響が響き渡り海賊船が木っ端微塵に消し飛ばされた。メ

リメリと音をたてながら残骸が海中へ沈んでいく。死にゆく意識の中で少年ははつきりと聞いた。蒸気船の汽笛と、外輪が水を掻く音。そして胸の空くような猛る声。

「我が名は坂本龍馬が海援隊、乙斗丸船長池内蔵太じゃ！貴様らつ、畜生にして人に非ざる者どもよっ！一人残らず叩つ切つてやるから覚悟せいっ！！」

鬼の子

4．拾われた子

龍馬は西郷のもとを訪れた。限界じゃき、我らじゃ本当の意味で彼らを救うことはできん。医者じゃ、本当に必要なのは医者じゃき。特に娘達じゃ。

矢継ぎ早に訴える竜馬の言葉に、西郷は頷きながらも本意を理解できていないようだった。竜馬は焦れて、声を荒げた。

「心が壊されちやるんじゃ！我らじゃ救えん。どうすれば良いかいの？医者じゃ、違う、医者でも無理じゃ。何か方策は無いか？」

西郷はもつそりと体を動かしながら窓辺へ出た。しばし海峡を見つめ漸く返ってきた答えは、「わかりもうさん」というものだった。「アーネストという御仁に会ったことは？」西郷が聞く。

「無い、確か英国の通史じゃったか？」

「ふむ、あんしに相談してはいかかのう。船はこちらで用意するとして、西洋の医者を連れて来てもらってはどうかじゃろう。病院船じゃ」

「よし、それはおんしに任せたきに。それはそうと、先日面白い者を拾った。いや、面白いなどと言っちゃあいかんがに。鬼よ。鬼の子を拾うた。聞きたいか？高杉晋作の子じゃ」

西郷が興味を示し、身を乗り出して聞き入る。龍馬はかいつまんで話して聞かせた。

一週間程前、海上を漂流している船を見つけた。生き残っていたのは子供がたった一人。よほどの目に遭ったと見えて、一言も口をきけぬ。ただ、恐ろしい形相で周囲を睨みつけるのみ。何故高杉の子と判ったか、それは高杉の妻政の手記が船倉に残されていたからだ。そこには、萩崩落以来、近郊の虎ヶ崎の漁村に身を潜めていた事、やがて幕兵の搜索の手が近づき、周囲の勧めもあつて此度の船出となった事など、事細かに記されていた。そして、その本人は亡

骸となつて甲板にあつた。自害した姿で。手には自ら掻つ捌いた腹から取り出した肝臓を握り締め……。これより先は推測にしか過ぎぬが、おそらく海賊の襲撃を受け同乗者は皆殺しにされ、彼女自身も陵辱されたとみえる。その間、子の東一は何処かへ匿われて難を逃れたのだろう。海賊が去つた後、甲板に戻り彼が見たものは自害した母、あるいは自害を決意した母。水も無い食糧も無い漂流する船で、我が子を助けるため彼女は自らの腹を裂き、内臓を取り出し、我が子に与えたのだ。すなわち東一は、己が母の血を飲み、肉を喰らい生き延びた子である。

「どうじゃ？」龍馬は聞く。「鬼の子であらう？」

「奴にあるのは、幕府に対する強烈な復讐の怨念のみ。今はわしが預かつちようが、このまま長ずればまさに鬼神とならう」

龍馬のその言い回しが西郷には気にかかり「坂本さあよ。この内戦は長引くんかいのう……。」「と尋ねた。

「長引けば何じゃ？」

「いや……。長引けば、その様な子等がこの戦を受け継いでいくかのう、と思つてな」と続けた。

「幾つの子かいのう？」

「数えで十二・三といった処じやろう」

既に維新回天の期は逸した。否、訪れなかった。薩摩と長州を結ばうと竜馬は考えていた。西郷もそれは乗り気だった。だが、長州はこの有様である。

「そうそう、忘れるとこじやつたきに」龍馬は急に思い出したように言った。

「実は中岡慎太郎を通じてじゃが、土佐参政後藤象二郎が俺に会いたがっているらしい」

「ほう」

「会つてみようかと思つちよる……。」「

「それで？」

「土佐藩と手を組むつもりは無いかいの？」

西郷はポンと膝を叩いた。是も非も無く乗り気な時のしぐさである。ただ、問題なのは薩摩藩ではなく、佐幕派の土佐藩主山内容堂の方である。かの堅物を後藤がどう説得するか。

もうひとつ、大事な話を忘れるところじゃった。別れ際竜馬は付け加えた。実は朝鮮に人をやって調べさせたが、長州藩主は勿論、桂の姿さえ見つけることは叶わなかった。朝鮮政府に問い合わせると、日本国政府からも再三身柄引き渡しのを要請が来ているが、そのような者、亡命の事実は勿論、渡航した記録さえないそうじゃ。

ロザリオ

5・晴蔵

小一郎は思うところあつて晴蔵のもとを訪ねた。途中、廃村になつた吾野郷を抜けた。庄屋屋敷で襲撃されたあの村である。あの人々も村を捨て逃げだしたか、あるいは農兵隊であることが露見し連行されたか？いずれにせよ、今は一人一人いない無人の廃村である。変わり果てた村の中を通り抜けて山道へ入って行く。さらに上吾野で多津の墓を参り線香を手向けた。

小屋に着くと、晴蔵は「これは珍客じゃな」と喜んで迎えてくれた。小一郎はしかし渋い顔をして入る。向かいあつて座り、しばし二人とも無言である。やがてゆつくりと、小一郎は語り始めた。

「思えば・・・可笑しな話だと始めに気付くべきだった・・・藩主亡命など、いくらなんでも荒唐無稽すぎる。・・・ましてや日ノ本が歴史の中で朝鮮半島に何をしてきたか、それを思えばいかに桂の政治手腕をもつてしても彼の国が受け入れるとは思えん。・・・故に、毛利候は始めから亡命などしていなかった。・・・ずっとこの長州に居たんじゃ」

晴蔵はさして驚いた風もなく、ほう、すると何処に？と静かに聞き返す。

「思えばここに居たとき、夜はむろん昼でも小屋の外に人の気配を時折感じた。てつきり狸だとばかり思い込んでいたが、いや、思い込まれていたが、あれは奇兵隊精鋭の護衛であつたと考えればつじつまが合う。さて爺の問いは、藩主はすると何処に？じゃったな」小一郎は真直ぐに晴蔵の目を見つめ、答えた。

「おそらく、秋吉台の何処かに奇兵隊本隊と共にいる」

「で、それがわしに何の関係がある？」晴蔵は笑みを浮かべ問う。

「毛利候には隠居した父君がおられる。その行方はこれまで限られた者以外誰一人知らなかった。が、」

小一郎は最後まで言わなかった。

静かに笑みを浮かべたまま、晴蔵は肯定も否定もしなかった。

「邪魔をした」信を得て小一郎は席を立った。「毛利候に会ったら伝えてくれ。候を慕い朝鮮へ船出する民が後を絶たぬ。その人々はことごとく虐殺の運命にある。候に民を思ふ心あるならば、一刻も早く我ここにありと宣言してくれと」

晴蔵は、ぬしの言うことはもつともじゃがと、前置きし言った。

あくまで物静かな口調だったが、それは悲痛な心情を現していた。

「たとえ藩主が長州にいたとしても、彼らは逃げねばならぬのじゃ。いずれにせよ、命が危ういゆえにのう。どうすればよいかの。小一郎よ。頼みの綱は奇兵隊か？しかし総督の高杉は既に肺を患って死んでおる。秘密じゃがの……。今の奇兵隊は統制がとれているとは言いがたい状況じゃ。民を救うために、小一郎よ。ぬしに出切る事は……」

「解つておる」皆まで言わすなとばかり、小一郎は晴蔵の言葉を遮った。

晴蔵は短歌の上節を詠み問うた。

「おもしろき、こともなき世をおもしろく……高杉の辞世の句じや。お主ならこの先どう続ける？」

「おもしろき？」小一郎は呆れた口調で返す。「……わからん。

この国は血と涙に溢れている。この民の血も涙も天には届かぬ」

「届いておる。故にぬしら二人は死なぬ」晴蔵は確信しているのかのごとく言った。小一郎は思わず笑みを返した。

小屋を出て行く彼に、「話は違うが、……わしはただの名もなき陶工として生まれたかったのじゃが」と言つて晴蔵は寂しげに笑った。

「何の話だ？俺はただの爺様に会いに来たのだ。藩主云々と言うのはただの余談じゃ。また世間話をしに来るゆえ、その時は狸を馳走になるうかの。皆を連れて来る。色々あつて連れが増えてな」

「そうか、それは楽しみじゃ」晴蔵は笑いながら見送った。

6・英国

英国の新聞の一面に千鶴の写真が載った。幼い子供とは思えぬ虚ろな瞳と表情で、手には口ザリオを握り締めている。併せて、虐殺された人々や村の写真も載った。記事の中で千鶴は、政府軍の兵士によつて虐殺された姉の形見の口ザリオを持つ少女と紹介された。

世論がおこるにそれで充分だった。人々はそれを、遠い極東の無関係な国での出来事とは受け止めなかった。なぜなら写真の少女がキリスト教徒だったからだ。

そして、奇跡。弾圧と二百年間の鎖国の間も、信仰の灯火が消えていなかったことを、人々は奇跡と受け止めた。

御用金強奪

7・御用金強奪

小一郎は腰のホルスターに二丁の拳銃と奇兵刀を挿し、肩バンド式ホルスターで更に腹に二丁、銃を装備した。背中の銃はやめ、代わりに弾を込めたシリンドラーを腰のベルトにありつけたけ取り付けた。鎖帷子をコートのようにはおり、懷に三日月、その背に黄金虫を装備し、皮の仮面で目元を隠すと口にも一丁ガッシと銃を咥えた。伊予乃介はシンプルに、ただ鎖帷子を着込みシヨルダー式に紐をつけた人消しを肩に掛けた。こちらはすっぱり顔を包む鎖を編みこんだ覆面で顔を隠している。無論、業物の大刀が腰にある。

襲撃ポイントは既に定めてある。仕掛けもある。二人は幕府軍資金の運搬を襲撃するつもりだ。それは、幕軍にとってはある種の示威行為である。この大金を陸路運搬できるほど長州を制圧しているとの。その鼻を明かしてやる。さらに奪った金を民の為に使う。

片側が急斜面の山、反対側には田が広がる小道を行列はゆつくりと進んでいく。二人は木立の中に身を伏して連中が通り過ぎるのを待つ。五十人はいるだろう。まともに考えれば無茶すぎる。二対五十である。小一郎は体の震えを感じた。今更ながら、よくぞ今まで無事であったと思う。民を救うため夢中であつたが、本来なら如何な歴史上の剣豪でもこの様な勝負は避けたであらう。

行列は目前を通り過ぎ、既に先頭が仕掛けのある場所まで到達している。

「・・・行こう」伊予乃介が静かに言い、それを合図に小一郎は脱兎の如く駆け出した。すでに平常心に戻っていた。駆けながら牙を飛ばした。

列の最後尾の者達が音もたてずに倒れてゆく。一隊が襲撃に気付いたときには、二人は幕兵の只中に深々と切り込んでいた。伊予乃介は抜刀し既に三人切り伏せていた。小一郎も銃を抜き手当たり次

第に撃ち殺した。思わぬ襲撃に敵は浮き足立っている。誰かが辛うじて「台車を護れっ！」と叫んでいる。お陰で御用金の台車のありが分かった。小一郎は向かってくる敵を次々撃ち「この金貰ったっ！」と叫び、台車の上に飛び乗った。わらわらと槍をかざした幕兵が小一郎を取り囲まんとする。小一郎は懷から煙玉を取り出し地面に叩きつけた。もうもうと辺り一面煙に包まれ敵も見方も見えなくなる。既に小一郎は台車の上にはいない。車の陰に身を隠し、敵の陰を狙い撃ちする。「頃合、良からう」そう呟くと背中の中を切りたつた山の上の方へ飛ばした。煙に邪魔され、一枚目、二枚目ははずした。しかし三枚目は狙いたがわず、山中、大量の丸太や岩石を結わえた一本のロープを断ち切った。どうつと、大量の丸太や大岩が土砂を引き連れて急斜面を雪崩を打って落ちてくる。その音に幕兵らは肝をつぶした。彼らの脳裏に先日 of 戦いの噂がよぎる。狗が現れた後に、奇兵隊本隊の大群が現れたと聞いた。誰かが、奇兵じゃ、奇兵隊本隊が攻めてきたつ、と叫ぶや我先にと逃げ出し、一人残らず逃げ出して、逃げ切れなかった者達は土砂の下敷きになった。

後には一台の台車が残った。三万両というのは千両箱三十個である。

二人は用意しておいた百姓が使う荷車に箱を積み替え、上から藁をかぶせ自分達も百姓姿に着替え立ち去った。

その夜、方々の家々に小判が放り込まれた。

下関に立ち寄ったアーネスト・サトウを、一人の侍が訪れた。水戸藩士であるただけ告げ、名も名乗らぬ。男はキャンプ設立の為に寄付を申し出たいと言い、二万両を置いて行った。

香枝

8・香枝

「香枝殿、まだ起きておるか？」小一郎は襖越しに聞いた。今宵入り口の部屋に寝るのは小一郎である。「起きているのなら、少し話をしたい。こちらに來られぬか？」暫く待っても返事は無い。そうか、もう寝ているのだなと思った時、襖の向こうで香枝が言った。「いやです。また襲われます故」

小一郎は憤慨して、あれは、戯れに、と言ってしまったものだから、

「小一郎様は戯れにあのような事をなさるのですか」と、反撃を受けた。どうにも分が悪い。小一郎は正直に「あれはあの時、そなたがあまりにしつこく聞いてくる故追い払ってやろうと思って脅かすつもりでやった事じゃ。言いかたは悪いが……。気を害したのなら誤る。この通りじゃ」誤ってはいるが、正直すぎて火に油を注いだような物言いだ。

「謝って貰わなくても結構です。どうせしつこうございます」と、ますます取り付くしまも無い。小一郎は話題を変えた。

「香枝殿は最近話題の狗のこと、どう思われるか？」

「この頃では義賊気取りで、鼠小僧の真似事をされているとか、ご立派なことで結構ですね」冷ややかに言いきった。「傍で心配されているお身内の方もいらつしやいますように」

彼にしてみれば心外とも言える答えだった。弁護するつもりで「いや、おそらく天涯孤独の身であろう。俺はそう思うが」と言った。「でしたら」香枝は憤った口調で答えた。「好きになさるが良いでしょうね。そうしていずれ命運尽きて捉えられるか、殺されてしまうのですわ」

小一郎も、自分の事となれば伊予乃介と並び劣らず鈍い。まさか香枝に見抜かれているとは思ってもよらず、また香枝が彼を心配して

思つ心にも気付かず、答えに窮したまま沈黙した。香枝もまた黙つたままだった。

その夜、彼は香枝に告げるか否か、迷っていたことをとうとう切り出すことが出来なかった。萩城で名簿を見つけたのだ。連行され処刑された萩の人々の。その中に彼女の夫の名があった事を。

豊永志功

9・豊永志功

萩城占拠以来、攘夷派の処刑、町民の捕縛処刑、そして奇兵改めこと村々の殲滅作戦、この男の行状は冷徹極まりない。常に酷薄な判断をもつてして今日まで順調に（彼にとっては）出世の階段を上がってきていた。この男の思考回路は昆虫に似ている。捕食するかされるか、そのみである。危険となれば逃げ、食えるとなれば徹底的に喰らう。故に決断が早い。証拠が見つかりつこないとなれば一村を殲滅せしめることにいかほどの躊躇も無い。証人を残さぬために、幼い子供まで殺させる。そのことをなんとも思わない。勿論自分の手は汚さない。また、権力に対しては犬のような鼻を利かせ、常に大老の意を酌み先読みし取り入ることに掛けては誰にも負けない。と言うより心ある者ならば誰も真似したくないだろう。同僚に対しても、利用できる者には下手に出て、そうでない者には威張り散らす。勿論部下に対しても厳しい。人間とは思っていない。

その男が憤慨していた。二度・三度と鼻を明かされている。たった二人の男にだ。物事が自分の思うとおりに為らぬ、それは彼にとって非常なストレスである。斑の狗とは一体何者なのか？なぜ彼の出世の邪魔をするのか？疑問は続く、きりが無い。英雄気取りで覆面などしおって、・・・一人は奇兵であると分かる。はつきりしている。牙を使う。しかもかなりの使い手だ。しかし・・・彼は冷静に考える。

ならば、奇兵と共に戦えばよい。そうではないか？何故、好んで二人組みで三十人からいる敵に戦いを挑む。

そもそも何故覆面で顔を隠す必要がある。英雄を気取りたいからか？否。否、否。

違う。そうじゃあない。

我らの見知った顔なのだ！そうだ。違いない。奴らはきつと幕府

軍の中にいるのだ。故に顔を隠す！一人は奇兵くずれで、一人は幕軍の何者かだ！故に斑を名乗るのだ。

豊永志功は即座に部下を呼んで狗が現れた日に登城していない者を調べるよう命じた。

アーネスト・サトウ

10・芸州口

（後年、出版されたアーネスト・メーソン・サトウの手記より）

この年の十一月、私はパークス卿と共に江戸城にいた。大君（將軍）に面会を申し出たが、会えたのは思ったとおり決定権を持たないその下の人々だった。我らの申し出に対し、

「この様な重大事、萩におわします大老の意見を伺いませんと・・・」と、彼らは答えを先送りにしようとしたので、私は卿に目配せをした。卿は私の意を酌み物凄じ剣幕でまくし立て、（この頃になると政府側の役人に対する対応を我々も熟知していた）当方の意見を延々説いた。

我らの要望とはこうである。長州避難民の収容所を選定するにあたり、私は方々の地を候補に考えてみたが、皮肉なことに最も治安の良くかつ人々が容易に逃げ込むことのできる理想的な地は下関であった。しかし、そこに米軍が布陣している以上、いつ戦禍にみまわれるとも限らない。その様な場所に民間人を多数収容する施設を作ることは出来ない。すると次に考えられるのは、隣国の小倉藩が芸州藩である。瀬戸内海を渡り国東半島も考えられなくも無いが民衆にとって危険が多すぎる。現在日本海側にいる略奪者が瀬戸内海に回ってくるだけである。陸路（それも安全とは呼べぬが）人々が避難可能なのは芸州藩（広島藩）のみである。小倉藩は大君の領地である故もとより望めぬと私も思っている。芸州藩ならばもとも長州藩とは親藩であり、人々も長州には好意的である。故に最終的な候補地に残ったわけだが、現在芸州には幕府軍が布陣しておりとても長州側の人々が逃げ込める状況ではない。そこで我々は芸州藩からの幕軍の撤退と彼の地に長州避難民収容施設を建設する許可を求めに来たのだ。我らの主張する点は明快である。我が英国政府はなんら見返りを求めず、政治的な介入ではなくただ人道的な立場

からこの国の民衆を救う手助けを申し出ているのである。

卿は恫喝をもって二者択一を迫った。すなわちこの申し出を断るほど大君の政府が不明であり、なおかつ米国の内政介入をこれ以上許すのであれば、英国は反政府側の諸藩に力を貸しこの日本国を舞台に、米国と代理戦争に至ることも辞さない覚悟である、それでも良ければ断るがよい。卿は強硬に即答を要請した。

政府側の閣老達はおおいに慌て奥へ引つ込み暫く話し合っていたが、ようやく戻って来ても意味不明の言葉ではぐらかそうとする意図が見える。そこへ一人の奉行^{ガバナー}が入ってきて閣老達になにやら耳打ちし、するやいなや一変して彼らの安堵する様子が手に取るようになった。私が思うにこの奉行^{ガバナー}は奉行は^{ガバナー}大君の意思を伝えに来たのではないかと思う。もったいぶって伝えられた答えはイエスだった。

こうして我々は手こずりながらも日本国政府を動かし、第一歩を踏み出すことに成功した。

日を置かずして、この話は萩の大老井伊にも伝わったようである。彼は大変憤り、早速江戸へ向かう手配をし、出立する前に米軍総督リチャード氏を萩城へ招いた。自身が留守の間、下関の米軍に長州の治安維持に協力して貰う為だ。悲報が届いたのはその三日後である。この大事件に日本在留の外国人社会がどれほど衝撃を受けたか、生麦事件の比ではない。

策略

11・策略

小一郎は手傷を負い伊予乃介に肩を支えられながら茶店へ戻ってきた。深夜である。香枝に気付かれぬよう黒衣を脱ぎ、傷の手当てにかかった。後ろから切りつけられた。さほど深くはないが大きな刀傷である。極力物音を立てぬ様にしていたのに、気が付くと香枝が後ろに居た。二人は慌てて散らばった武器や何やを隠そうとする。しかし彼女は一言も問うことはせず、傷の手当てに加勢した。目につつすらと涙を浮かべている。

今宵彼らは萩城でたんまり賄賂を受け取ったはずの米軍総督を郊外で待ちつけ襲った。護衛には米兵の姿はなく幕兵のみだった。豊永志功が馬上にいた。襲撃と同時に姿を消したが。幕兵をあらかた倒し、籠の中の米軍総督に「その金渡して頂こう」そう声をかけた時だった。手負いの幕兵に背後からばつさり切られた。伊予乃介が即座に倒したが、小一郎の血は止まらない。二人は金をあきらめその場を急ぎ立ち去った。その後起こったことを二人は知る由も無かったが、物陰に身を潜めていた豊永志功が戻ってきた。驚愕さめやらぬ様子で「今のがマダラノイヌという噂のニンジャか？」そう問いかける米軍総督を、豊永は答えず無言で撃ち殺した。それから自身の左腕を自分で撃つとその場に倒れこんだ・・・。

「危のうございます・・・」傷の手当てをしながら聞き取れぬほどの声で香枝が言う。

「すまぬ」小一郎はそう答える。他に言葉は見つからない。香枝にも。言いたいこと、聞きたいことは山ほどある。だが、言えない。「危のうございます・・・」そう繰り返すのが精一杯だった。

翌朝、萩は米軍司令官の殺害事件の話で持ちきりだった。たった

一人生き残った豊永志功の話が情報源の全てだった。それによれば、一隊は斑の狗により皆殺しにされた。彼自身も腕を撃たれ気を失っていたが、気付いたとき斑の狗が米軍総督の乗った籠を襲っていた。彼は背後から切りつけたが、時既に遅く総督は賊の手にかかり殺められていた。傷を負った狗は金を残して逃げ去った。以上が、昨夜の事件の一部始終であるとして、話は広がった。

小一郎は憤慨した。奸佞！許せぬ！如何な教育を受ければあのような人間となるのか！臥したまま力なく罵る。その口に香枝が粥を運ぶ。香枝は茶店を作蔵まかせにして、小一郎の傍を片時も離れない。

その様子を伊予乃介、暫く眺めていたが、微笑み、
「そろそろ刻限ゆえ、行かねばならぬ。・・・小一郎よ、義賊というものの、なかなか楽しかったぞ」
「素晴らしい残すと席を立ち出て行った。それが伊予乃介と語った最後となった。」

逆転

逆転

1．暗殺

時として歴史は一事をもつて逆転する。それがずっと以前に起こって然るべき出来事であつたならなおさらである。その日起こつた出来事は日本中を驚かせたばかりでなく、討幕を志す日本中の浪士を奮い立たせた。

江戸へ向け出立した井伊直弼が、道中昼日中三十人の水戸藩士により暗殺された。首魁鮎沢伊予乃介、水戸従軍組大将である。しかし彼を始め暗殺者の主だつた者達は、皆偽名であつた。水戸藩の士録を照会してもその名は無い。その名は安政の大獄で処罰された水戸藩士の名を各々組み合わせたものだつた。鮎沢伊太夫、茅根伊予乃介、安島帯刀、鵜飼吉左衛門、同幸吉……。この一事からも、これが始めから計画的な覚悟の幕軍潜伏であつたことが窺える。

襲撃は萩郊外の、すすきの広がる平原で行われた。道は野を横切つて、暗殺者達はすすきの中に身を潜め、通り過ぎる大老の一行を野の双方から銃撃した。すすきの中に隠された鉄の板を盾に、ライフルで一斉射撃を加え、幕軍をほぼ殲滅するや、抜刀し駆け寄り大老の籠を取り囲んだ。井伊直弼は籠の中で豪胆にも逃げ出そうとはしなかつた。襲撃者達に「ぬしらつ、日本の」と恫喝しようとしたところを問答無用と群がる白刃に貫かれた。本懐を遂げると水戸藩士達は刀を捨て、生き残つていた幕兵らにおとなしく投降した。小雪舞い散る十二月十五日だつた。

一報は何処よりも早く、萩に届いた。香枝の茶店にも誰や彼や常連客が立ち寄り次々と情報がもたらされる。それらは混乱し正確さを欠いた情報だったが、後に判明した事実関係は上述の通りでほぼ間違いない。ただ、今の時点では情報は錯乱していた。が、まもなく水戸藩士らが市中へ戻つてくるといふ。人々は一目見ようと通り

で待ち受けた。香枝も、千鶴、作蔵と共に店の前に立つて待った。その時はまだそこに伊予乃介がいようと夢にも思っていなかった。ただ水戸藩士ということと不安な思いは抱えていたが。

小一郎は店の二階の窓から通りを見下ろしていた。いまやはつきりと分かつていた。鮎沢、茅根、伊予乃介、伊太夫。彼の知る水戸藩士はどの名も安政の大獄にて聞き覚えがあるものばかり、あの若者、茅根幸吉しかり。・・・もっと早く気付いて然るべきだった。出合った時、拙者にも拙者の志があると奴は確かに言っていた。それが之だったか。茅根という若者も始めてここに来たとき意味深なことを言っていた。あれは、俺もこの計画の仲間かと伊予乃介に問うたものだったか。いや、今では伊予乃介ではない。一体奴は何者だったのか？

やがて一行が窓の下を通った。無論帯刀は許されていないが、腰紐は打たれていない。整然と列を作り幕兵に連行されていた。その先頭に伊予乃介がいる。その姿を見て香枝が驚いて泣き出した。二階から見ても分かる。伊予乃介はその香枝に見知らぬ顔を通した。ただ、二階を少し見上げその時小一郎と目が合った。一瞬であったが万感の思いをその一瞥に込めていた。小一郎は全てを受け取った。そうして一行は通り過ぎていった。この後詮議がなされる。一行は士分ということではこの屋敷預かりとなるだろう。

今日、あだ討ちをなしたという事は、特別な意味を持つ。情的に先例を思い出させずにはいられない。この後彼らの辿る運命も歴史の中のあの事件に似たものになるだろう。しかしそれは楽観論だろうか？

さて、と 小一郎は思う。自身の身の振り方を考えねばならぬ。香枝に迷惑を掛ける事だけはあつてはならぬ。伊予乃介と名乗っていた武士は決して口を割らぬだろう。狗のことは勿論、本当の自分の身分さえ。しかし何処から漏れぬとも限らぬ。その場合のことを考えて置かねばなるまい。

米軍捜査

2．米司令官暗殺事件の捜査

米軍の捜査は、初めて斑の狗が現れた村の生き残りの証人の尋問から始まった。この時、かの二人組みは村人から噂の天狗様でしよう？と問われ、始めて斑の天狗を名乗っている。ここで重要な事は、既に天狗の噂があったことである。村々の間に近頃山から降りて来た天狗がいるという噂が広がっていたことである。捜査の手は広がり、やがて農兵隊の嫌疑で捉えられていた吾野郷の生き残りの若者が獄中から引き出された。若者はなかなか口を割らなかったが、己が家族の命を保障することと引き換えに証言した。ある夜、村を訪れた鮎沢伊予乃介という水戸藩士とその家来を襲撃したが、二十人以上いた仲間の半数以上が家来の男に返り討ちにされたことを。その噂が広がりいつしか天狗の化身と呼ばれるようになったことを。

米軍は現在井伊直弼暗殺の罪で捉えられている鮎沢伊予乃介こそ、斑の狗の片割れであり、米司令官暗殺者であると断定し、その身柄引き渡しを萩の幕軍に要請した。

3．ロザリオ

千鶴は香枝に伴われて伊予乃介に面会を求めた。既に豊永志功からの下命で、水戸藩に照会しても身分の明らかでない者、暗殺の首謀者五名は氏名身分共に不詳の者として、極めて惨い拷問にかけられることが決まっている。つまり士分としては扱われず、士農工商外の罪人として扱われる。今はまだ屋敷預かりとなっているが。

許されるとは思っていなかったが、面会は叶った。少し憔悴した様子で伊予乃介は現れた。頬に額にあざがある。黙りこくっている二人に彼はことさら明るく振舞ってみせた。まもなく米軍に引き渡されるであろう事も告げた。小一郎にくれぐれも宜しくと、つまり姿を消すよう暗に促した。

別れ際、千鶴は宝物のロザリオを伊予乃介に渡した。伊予乃介は大切に受け取った。

「千鶴……。ありがとう」

千鶴はにっこり微笑み、懸命に何かを発音しようとしたが叶わなかった。

獲物

4・獲物

豊永志功は地団駄踏んで悔しがった。彼の搜索でも、既に鮎沢伊予乃介とその家来の名が浮かんでいた。逗留している茶店も調べ上げていた。後は踏み込むばかりだったのだ。米軍にでかい油揚げをさらわれた気分だ。腹の虫が収まらぬので引渡しの期日まで、拷問にかけ本名を吐かすこととした。既に茅野幸吉と名乗る若者の正体は割れた。拷問でも吐かなかったが、佐幕派の水戸藩士を江戸から呼び、首検分を行ったのだ。その男が見知っていたのは茅野幸吉一人のみだったが、本名葦辺平九朗。安島帯刀の遠縁にあたる。水戸藩要人の護衛を担当する家柄だ。例えば藩主跡取りなど。とたんに幕府内からも慎重論が出た。この男がその身分なら首魁である鮎沢伊予乃介は押して知るべし、である。下手をすれば水戸藩を討幕派に廻しかねぬ、と言う。しかし彼は、ならば水戸藩を反逆の咎で他家没収とすることも出来よう、と反論した。故に奴は名乗れぬ。水戸藩も動けぬ。奴が名乗らぬ以上士分ではない罪人としてその身柄は取り扱う。期日には米軍に引き渡す。彼はほくそえんだ。これで奴は名誉ある切腹など望めぬ。

それに自分の手柄となる獲物はもう一匹いる。狗の片割れた。鮎沢と名乗る男には常に側を離れぬ家来が一人いた。その男は今回捕えられた中にはいない。名を小一郎という。こやつこそ狗の片割れに違いない。居場所も明らかである。しかも今なら手負いである。鮎沢の背に真新しい刀傷がない以上、あの時斬られたのは片割れの方である。

全てが彼にとって好都合だった。

大老の死さえも……。お陰で全権が一時的に彼に預けられた。彼はそれを磐石のものとするつもりだ。全てが彼の思い通りに運び始めていた。

裁判

5. 裁判

小一郎が姿を消した。後には簡単な置手紙があつた。香枝宛に、迷惑をかける結果となつてすまないこと、千津を頼むこと、いずれ会える日が来るであろうこと、記してあつた。百両の包み五つと併せて。

茶店は火が消えたようになった。時折常連が訪れても、名物のほぎを頼む者はいない。たとえ注文してもお約束のまけてくれは言わない。まるで香枝が負けますと言うのを懼れるように。

下関では裁判が始まつた。氏名不詳自称鮎沢伊予乃介は米軍の尋問に、米司令官を殺害したのは自分ではない、ばかりでなく一人の米国人もこれまでに殺害したことはないと答えた。傍聴席の豊永を一瞥し皮肉たつぷりに、おそらく襲撃の際物陰に隠れていた何者かが私が去つた後、私に罪を着せんが為なした事でしょう。と答えたが、

審議ののち有罪が告げられた。刑は縛り首である。

悲報はすぐに萩にも伝わった。

もうそろそろ店じまいという時間に、一人の老人が茶店を訪れた。お茶とはぎを注文した。老人は「ちと高いのう、まけてくれんか？」と尋ねた。香枝は久しく聞かなかつたその言葉に、殆ど条件反射的に「いいえ、はぎはまけません」と力なく答えた。

「なんじゃ、小一郎から聞いた話とは大違いじゃな。もつと元気な娘かと思つておつた」老人は言つた。香枝は驚いて問うた。

「小一郎様をご存知なんですか？今何処に？」

「ふおつふおふお、そう急ぐでない。わしは晴蔵という。小一郎に頼まれて来た。注意を促しにの。この店幕兵に囲まれておる。今宵あたり危ないぞよ。いつでも逃げられるように支度しておくがよい」そう告げると老人は去つて行つた。香枝は「待つてください」と後

を追ったが既に何処にも姿がなかった。

逃避行

6・逃避行

とりあえず、お金とわずかな米、幼子の身の回りの物、必要最小限の物を荷物にまとめた。作蔵は小一郎にもらった人消しに弾を込めた。

「作蔵さん、出来る限り撃たないで」香枝が言った。

「へい」

「千鶴、大丈夫？」

千鶴は小さく頷いた。香枝は我が子の良太を抱き上げた。

「行きましょう」

幕兵に囲まれているのが判っているのなら、逃げ出したほうが得策だ。一行はそつと裏口から外へ出た。しかし程なく、それが甘い考えであつたことに気付かされた。路地という路地、どの道を辿っても人影が付いてまわる。幕府の捕り方に違いない。影を避け裏路地に入れば、そこにも何者かが待ち受けている。それを避け違う道を選べばそこにも影がある。とうとう袋小路に入り込んだ。もう抜ける道は無い。影は人数を増し近づいてくる。すぐ側まで来た。影が口をきいた。

「斑の狗こと鮎沢伊予乃介と小一郎が一味、作蔵と香枝であるな？ 神妙に従え。手向かわずば殺しはせぬ」

「違います。斑の狗とは何のことやら知りませぬ」香枝が気丈に答える。

「言い逃れるか、ひつ捕えい！」一斉に幕兵が刀を抜く。その時である。兵の前に一人の男が立ちはだかった。コートのようにはおつた黒い鎖帷子、黒い仮面。民家の屋根の上からひらりと降り立った。香枝らを背後にかばい、

「何故、茶店に潜んで居らなんだ？お陰で探したぞ。晴蔵は何を伝えたのか、まったく役に立たぬ爺だ」男は軽口を叩くように言う。

「小一郎様？」香枝が聞く。

幕兵が一斉にたじろぐ。

「狗じゃ、狗が出たぞ。捕えい！」

「作蔵、この道切り開くぞ。手伝え」

「香枝、子供らの手を引け」矢継ぎ早に言つと目にもとまらぬ早業で男は牙を飛ばす。異形の型の人喰い牙が向かつてくる捕り方の顔を割る。敵は梯子を用意していた。それで男の身を押さえ込もうとする。男は鼻で笑い、

「こやつら“徳川”時代の捕り手じゃな。既に時代は……」拳銃を抜くと捕り手の眉間を撃ち抜いた。道は幸いにも狭い。敵は一斉には襲つてこられない。正面の敵だけ次々倒していけば良い。が、ライフルを持った敵が数人いた。

「香枝つ、作蔵、伏せい」男は敵がライフルを構えるより早く撃つた。

「作蔵、撃てつ！」作蔵が人消しを撃つ。一発で三人まとめて吹き飛ばした。その空きに、敵陣の後方にいるライフルを持った敵を狙い三日月を飛ばした。三日月は弧を描いて飛び狙い違わず命中した。後は刀と槍のみである。「容易い」男は呟くと再び拳銃を握った。

作蔵はすばやく弾を込め、人消しを撃つ。始めて共に戦ったが改めて小一郎の銃の腕に驚いていた。あまり頭の回るほうではない。が、小一郎と伊予乃介が斑の狗だと臆げながら気付いていた。今、始めて共に戦つて納得した。これなら三十人相手にも勝てるはずだ。数分後、累々たる屍の山で路地は埋まった。銃声に驚いた人々が窓を開け様子を窺っている。

「香枝、作蔵、行くぞ」男は言い、千鶴を抱き上げると先頭に立つて歩き始めた。後に、香枝と作蔵が続く。香枝が聞く。

「小一郎様でしょう？」男はそれには答えず、

「今は急げ、ゆっくり話している暇はない。今の騒ぎで次の捕り手が来る。早く萩を抜け出そう」と、香枝を促した。そして、怪我はないか？と気づかった。ありませぬ。と香枝が答えた。さらに、歩

けるか？と問う。大丈夫です。と香枝が答える。

「遠い道のりになる。千鶴の里、上吾野のさらに深い山中に晴蔵という爺の住む小屋がある。長州でもっとも安全な場所だ。そこへ行く」

一行は市街地を抜け田畑の広がる郊外へ出た。月が夜道を照らしている。背後の萩市中が騒々しい。兵隊の怒声と捕り方の笛の音が風に乗って聞こえてくる。

「香枝殿」男は言う。

「そなたに再び会えて・・・嬉しく思う」

「はい」香枝が涙ぐむ。追手の声が近づいてくる。

「俺はここで敵を待ち受ける」男は足を止めた。傍らに神社の鳥居と石段がある野道だ。

「いやです。一緒に逃げてください」香枝が言う。男は微笑み、

「案ずるな。必ず後を追う。作蔵、上吾野まで皆を案内できるな？」

そう言つて千鶴を作蔵に抱かせた。その時、である。

「・・・つやだよ・・・」聞き取れぬほどの声だった。

「反対の方へ行っちゃだよ・・・」千鶴が口をきいた。本当の意味は分からない、だが大事なことからしい。

「勿論だ。すぐに後を追う」そう言つて千鶴の頭を優しく撫でた。

「身を守る為にこれを持っていけ」拳銃と奇兵刀を一丁ずつ香枝に渡した。

「一緒に・・・」香枝が懇願するが彼は聞かない。

「香枝殿・・・」。このような時代に生まれたことを俺は恨む。出来ればもつと平和な時代に平和な国で生まれ、もつと早くそなたと出会いたかった・・・」次に続く言葉を小一郎は飲み込んだ。そして「必ずまた会える日が来る」とだけ言つた。

「行け」そう言つて後ろを向くと振り返らなかった。

香枝たちは立ち去りがたい思いでその場を去った。

一行が去った後、小一郎は奇兵刀を抜くとその場に仁王立ちになり敵を待ち受けた。拳銃の弾は既に残り少ない。やがて追手の提灯

が無数の蛍のように近づいてきた。

境内に小さなお堂があつた。小一郎は這うようにして中に入ると、床に倒れ、傷だらけの体を横たえた。そばに木彫りの仏がある。月明かりが格子を抜け、仏の顔を仄かに照らす。誰の手による像かは知らぬ。何菩薩か彼にはわからぬ。だが、その笑みが小一郎の心を打つ。如何な宗教的境地に至ればこのような笑みを刻む事が出来るのか？暗闇に浮かんだ仏の笑みは静かに、静かに、疲れ果てた彼の心を癒していった。

それは約百年の後、柳宗悦によつて見出される木喰上人の彫りし菩薩像であつた。

やがて彼は、その仏の足元で、深く安らかな、眠りに沈んでいった……。

エブラハム・リンカーン新聞演説

7・米大統領候補エイブラハムリンカーン新聞演説

私は、私のこの小さな声が過日訪れた遠い東洋のあの美しい島国の友人達に届くことを願ってやまない。私はその国を思うとき、必ずやこの私の思いが彼の国の友がらに届くことを願ってやまない。今では私は朝な夕なその国を思わずにはいられない。その国の子供らを思わずにはいられない。見知ってしまった今、知らねば気付かずにはいられない。そこで流される幼い子供達の血と涙を、我が子の流す血と涙のように感じずにはいられない。事情を知る人は言うであろう。彼の国で起こっている虐殺は政府軍と反政府勢力の争いである。アメリカ軍は極力その内戦に係わらぬようにしている。だが、はたしてそうであろうか？ 私は我がアメリカが政府軍側に大量の武器供与を行っている事実を暴くことも出来る。その材料はある。しかしここでは敢えて取り上げる事はしない。もっと重要な事実がある。それは、我がアメリカ軍が反政府勢力の領地の一部を占拠しているという事実である。それが為、それが引き金となり、今日の混乱と内戦を生んだという事実から我々は眼をそらしてはならない。

（中略）

罪なき民衆の虐殺に、直接的にせよ間接的にせよ、我がアメリカがかかわる時、幼き子供らが命を落とすとき、我がアメリカの正義は、正しい選択をせねばならぬ。今、我々は二者択一を迫られているのだ。

賢明なる我が同胞よ。我が愛するアメリカ国民よ。

私は、我がアメリカの正義と自由を信じる。我が同胞の正義と自由を愛する心に訴える。今こそ決断すべきときである。即時撤退か否か、全ては正義と自由の名のもとにおいて。

戦いを受け継ぐ者

終章

1. その日

その日、三月十三日、米軍の政治犯収容所の前は黒山の人だかりとなった。そこばかりではない。処刑の行われる火の山中腹にある米軍の公開処刑場に至るまでの道のり、その沿道全てに群集が集まっていた。誰もがその男を一目見ようとつめかけた。狗と呼ばれた男の片割れ、そして憎き幕軍の大將井伊直弼を暗殺した英雄を。

やがて引き出されてきた男の姿を見て人々は驚愕しどよめいた。

群衆の中の一人の浪士が我を忘れ叫んだ。

「米兵に問う！ まこと、日本の本^{もの}の武士をかような屈辱を持って処すつもりかっ！」

伊予乃介は殆ど裸同然の半裸の姿で、後ろ手に縛られ、首に鎖を巻かれ、荷車の上に立たされていた。その姿のまま、市中を引き回され処刑場まで運ばれる。

彼は気丈にも胸を張っていようとした。が、首の鎖が重くかなわない。自然うなだれる姿となる。沿道の人々に目をやる。どの顔も祈るような目で自分を見ている。町娘が泣いている。

荷車は市街地を抜け、海沿いの道を通り火の山を登り始めた。群集はぞろぞろと後を付いて来る。その行列は長くなる一方である。

彼は回想する。俺は侍として生をうけ、この生涯の中で充分な事を為しえたのか？ 自問自答する、が、解らぬ。だが出来る限りのことはした。思えば小一郎と出合ったのはちょうど一年前のこの頃だ。もう桜が咲いている。

荷車は処刑場に着いた。火の山の中腹に展望よく海峡が一望にできる開けた場所があり、そこに米軍の公開処刑場があった。木立より高く据えられた縛り首の桙木と階段。その前で車は止まり、伊予乃介は乱暴に引き降ろされた。処刑場は桜が咲き乱れ、もはや群集

は立錐の余地もない程つめかけている。

彼は遠い昔十字架に架けられた男のことを思った。そして多津のことを思った。彼らの受けた苦しみ比べれば、これから我が身に降りかかる屈辱など如何様にも耐え切れよう。後ろ手に縛られた手の中に千鶴から貰った口ザリオを握り締めていた。

伊予乃介は一段一段踏みしめて階段を登っていった。台上に着いた。眼下に海峡が見下ろせる。何処の藩の船か、美しい旗を掲げた船団が海峡にあった。白地に赤い丸。日の丸を掲げるのは何処の藩か。

目隠しをしようとした米兵に、要らぬ、と断った。

首にロープが巻かれた。手の中の口ザリオを固く握り締めた。台上から群集を見下ろした。千鶴と香枝の顔が見えたような気がして少し微笑んだ。

留め金が外され足場が消え、伊予乃介の体は宙に浮いた。次の瞬間凄まじい衝撃が首を襲った。動転した意識の中で思う。頸椎は折れなかった。ならば暫らくこの苦しみに耐えねば為らぬ。五分？あるいは十分？縛られていることを忘れたかのように己の手が首を庇おうとする。呼吸を求めもがき苦しむ体が宙でグルリと反転し、海峡の方を向いた。先程の美しい旗を掲げた船団が見えた。気のせい、かな、たなびく砲煙が見える。またグルリと反転し、群集が目に入る。もはや視界は暗くなり始めている。まるで暗転がかかったように目が見えなくなりつつある。音も聞こえぬ。最後に彼が見たものは、まるで海が割れるように群集が割れその先に黒い鎖帷子をコートのようにはおった見慣れた顔の男……。

道を作った群集の最前列に香枝と千鶴がいた。千鶴が目をはる。彼女の前を黒い閃光が駆け抜けた。……こいちゃん。

小一郎は跳ね、牙を飛ばした。伊予乃介の体が、群衆の中へ吸い込まれるように落ちた。山の斜面に砲弾が次々と着弾した。桜を散らし木々を巻き込み土砂が崩れる。何が起きているのか分からない。

い。混乱の中、幕兵が人々を襲い、そして白地に赤い丸印の旗をか
かげた兵隊が現れた。

2・総攻撃

一八六四年三月十三日、薩摩、土佐、長州奇兵隊、そして坂本龍
馬の海援隊、中岡慎太郎の陸援隊始め、数多ある浪士の集団、討幕
諸藩の連合軍が日の丸の旗のもと、下関を総攻撃した。奇襲は成功
し米軍は下関から撤退、彦島に立てこもった。その後、長州藩主毛
利敬親が、我ここにあり、故にここは幕府天領にあらず、と、長州
国復興を宣言し、山口の政事堂に入った。彦島に籠城する米軍とは
暫らく膠着状態が続き、散発的な戦闘が繰り返されていた。しかし、
同年四月、米大統領選挙にて、奴隸制廃止と極東への軍事介入反
対を訴えるエイブラハムリンカーンが米大統領に当選。米軍は彦島
から撤退した。一ヶ月後、米にて南北戦争勃発。

3・戦いを受け継ぐ者

坂本龍馬は高杉の子、東一を連れて海峡の見下ろせる高台に立っ
ていた。

彦島占拠、続く萩落城、これで倒幕は十年遅れた。あるいはそれ
以上かも知れない。戦いは長引くだろう。

米軍は撤退したが、萩は幕軍に奪われたままである。実権を握っ
ているのは奸佞豊永志功。しかも小倉藩に幕府きつての切れ者閣僚
小栗忠順が入城した。形勢は決して連合諸藩に有利ではない。

「なあ、東一この内戦長引くぞ・・・おまんが長じてケリをつける
か・・・？」龍馬は傍らの東一に問いかける。相変わらず返事は無
い。ただ海峡を睨みつけている。その先にこの子が見ているものが
何であるか、龍馬は読もうとしたが無駄であった。

戦いは長引くだろう。

狗を名乗るものはもつけない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1516a/>

S F 奇兵隊 伝法斑の狗

2010年10月8日12時52分発行